ＢＣＬファンの交流誌　No.4

๑๏ยฅ๏ลวฯ

あーゆぼーわん

ジャズの特集号

2020 秋

序

1972～3年の頃でしょうか。わが町にもジャズ喫茶が出来たと言うので、近くなので行ってみました。
店内は、それほど広くはありませんでしたが、カウンターの壁面には数多くのレコードが並べられ、かなりの音量が響いていて、いかにもジャズ喫茶という雰囲気が漂っていました。音響装置も良いのが置かれているようでしたが、それに反応する耳を持ち合わせていませんでした。
友人と2人で入り、コーヒーを飲みながらおしゃべりしていると、客はおりませんでしたが、マスターから「うるさい」と言われました。どうやら、静かにコーヒーをすすり、黙ってレコード演奏に耳を傾けるのが、この音楽の楽しみのようです。
そんなことがあって以来、ズージャーはあまり聴かなくなりました。

（KOARA）

お・し・な・が・き

序／KOARA

ジャズとラジオ／@jj1bdx　2

JAZZY な記憶／なんば　ナナ　4

ＪＡＺＺ？クロスオーバー？フュージョン？／根岸　聡　5

いっしょシリーズ vol.3「インドネシアの声」といっしょ／植村　昭男　10

土曜の朝は JAZZ で目覚め、弁当作り。／Ｖｉｃ　26

えぃみぃの楽しいジャズライフ／えぃみぃ　27

ジャズ耳を鍛える／今井 靖　37

スリランカのお正月はいつ？／アエーシャー・ダルマシリ　49

スリランカのラジオの話／もういっちょアエーシャー・ダルマシリ　50

関ヶ原の南、藤原岳の麓に響く JAZZ／石崎亮史朗　52

魂(ソウル)のゆくえ／MAEMORITA　53

哀愁の秋葉原に電磁波が降るのだ／せきやま☆れいわ　61

ジャズとラジオ

@jj1bdx

ジャズに対する思い入れはそんなにないのだけど、ジャズを聞いたのはラジオからだったなあと思っている。いくつか自分の好きな曲と、それらのラジオにまつわる話について書いてみよう。なお、どこまでがジャズかというのは私にはわからないので、自分なりの定義になるのはご容赦いただきたい。伝統的なジャズはあまり出てこないと思う。

Keith Jarrett "Köln, January 24, 1975, Part I" (1975)

この曲は岡田眞澄さんという人がDJをやっていたFM東京の「夜のみちくさ55分」という番組の開始テーマソングだった。不思議な曲だった。ピアノの独奏だが、最初の数音で打ちのめされてしまう強さがあった。この曲をキース・ジャレットが全部即興で弾いていたというのを知ったのは後のことだ。小学5年から6年（1976~1977）のころ、毎週このテーマソングを楽しみにしていたことを覚えている。

Benny Goodman Sextet, Charlie Christian "Memories of You (feat. Charlie Christian)" (1940)

古典的なジャズというと、ベニー・グッドマンというクラリネット奏者を思い出す。この人の演奏はジャズとはいいながらも基本がしっかりしていて安心して聞けるという印象があった。この曲を最初に知ったのは1980年代半ば。ミニとはいえないミニFM局（もう時効だろうけどこれ以上は書かない）で遊んでいた時代があって、その時にオンエアで雑談をしていた相手から教わった。

Casiopea "Asayake" (from the album "MINT JAMS", 1982)

自分が一番ラジオを聞いていたであろう1980年代前半に一世を風靡したフュージョンの人達の代表にあげられるのはなんといってもカシオペアだろう。彼等の曲はどこででも、いつでもかかっていた。この人達の演奏は今聞いてもすごい。この曲はもともとセカンドアルバムの"Super Flight" (1979)が初出だが、メンバーの圧倒的な演奏力により数知れない各々違ったライブバージョンが出ている。その中でもMINT JAMSはライブアルバムであるにもかかわらず観客の声援等がほとんどなくスタジオ録音の品質が保たれている。

Herb Alpert "Rise" (1979)

ハーブ・アルパートはA&Mレコードの創始者の一人。オールナイトニッポンのテーマソング"Bittersweet Samba" (1965)を演奏したHerb Alpert & The Tijuana Brassのリーダーとしても有名であり、1980年のYMOのロサンゼルス衛星中継ライブでは最初の挨拶を務めた。その彼がソロアルバムとしてリリースしたビッグヒットがこの曲。曲の最初のコードから始まるシンプルでかつ強力なビートに載せて、持ち前のトランペットのソロが響く。この人の演奏には独特の哀愁と揺れがあって一発でわかるのだけど、ティファナ・ブラスから全然変わっていない。確か中学の遠足の時、山の上でFEN (810kHz)のラジオで聞いたのを覚えている。この曲を含むアルバム "Rise" (1979)と、次のアルバム"Beyond" (1980)は私のお気に入りの名盤達の中の2つである。

Azymuth "Outubro" (1980)

アジムスといえばNHK-FMのクロスオーバーイレブンのテーマ"Fly over The Horizon" (Album "Light as A Feather" (1979))が有名だけど（私は同じ曲の前のバージョンで初期のクロスオーバーイレブンに使われていたギターで始まる"Vôo Sobre o Horizonte" (Album "Aguia não come mosca" (1977)）の方が好きだったりするが）、このエンディングテーマも渋い。聞けば一発でわかるので説明は不要だろう。2000年代前半にCDを入手するのに奔走したのを覚えている。実はこのエンディングテーマはサンプルネタとしてまりんこと砂原良徳のアルバム"The Sound Of '70s" (1998)の複数の曲に大々的にフィーチャーされていて、まりん氏の博学ぶりには頭を下げざるを得ない。

Mireille Proulx "Vacances" (1992)

この曲はCBC Radio One Montréalの土日朝の番組 "All in A Weekend" のテーマソングとして知った。1990年代から2000年代にかけて日常的にストリーミングラジオを精力的に聞いていた時期があって、カナダ・ケベック州モントリオールの英語放送だったCBC Radio One Montréalをずっと家で流していたのがこの曲に出会うきっかけだった。この人はジャズのバイオリニストなのだけど、独特の節回しが印象的で、とても印象深かったのを覚えている。この曲の入っていたアルバム"Il Y Avait Des Pélicans" (1992)はピアニストとの相性も最高だった。

この記事で紹介した曲はすべてSpotifyで聞ける（2020年3月7日現在）。ぜひ聞いてみてほしい。

以下雑感。

そういえば、短波放送の大手だったVOAことVoice of Americaには、Jazz Hourというガチ直球ジャズな番組があった。テーマソングはデューク・エリントンの「A列車で行こう」だったそうで、アメリカの人はジャズが好きなんだな、というのを感じる。

音楽の歴史の中で、ジャズはその後のロック、ヒップホップ、テクノといった音楽の変遷に大きな役割を果たしたと思う。ここでは取り上げなかったが、多くのアーティストが、いろいろな形でそれまでの因習にとらわれない音楽を試していったのがジャズのジャズたる所以であったと思うし、そういう意味では何でもジャズと言い切っていいのではないかという気もする。そしてジャズと共に多くのラジオ番組も作られていったわけで、その意味ではラジオを育てたのはジャズ音楽であると共にジャズの精神ではないだろうかという気がする。

以上、短い文章だがジャズとラジオの話を終わる。

JAZZY な記憶

なんば ナナ

音楽の記憶

小学生の頃のわたしはごくありふれた J-POP が好きで、毎週ラジオで放送される J-POP のランキング番組を聴いてはヒットチャートを追いかけていました。どこの放送局でいつ放送されていたか忘れてしまいましたが、ランキング番組としては珍しく 1 曲最初から最後まで流してくれる番組があって、好きな音楽をカセットテープに録音するために特にその番組が好きでした。

JAZZ との出会い

あれは中学生の頃だったかなぁ、お姉ちゃんが通う高校の文化祭に行ったことがありました。軽音楽部の演奏を見ていたとき、他とは全然雰囲気の違うバンドグループが出てきて衝撃を受けました。それが JAZZ だったのです。「かっ、カッコイイ・・・！！」とにかくその印象は凄かったです。高校生になったらこんなこともできるようになるのかと驚きました。

影響されやすい性格

ちょうどその頃のわたしは J-POP から少し逸れて EDM とかテクノとかそういう音楽が好きになっていて、同級生と一緒に YMO のコピーバンドをやっていました。JAZZ とはおよそ対極にあるようなジャンルだったのでいきなり JAZZ に転向しようなんて思いませんでした。それでもあのカッコよさに影響されて、「わたし“テクノジャズ”やる！」なんて言って舞い上がったのでした。

JAZZY とはいったい・・・

“きっちり作り込まれた”、“プログラミングされた”、“無機質な”そんなイメージのテクノと、“自由気ままな”、“アドリブの”、“しなやかな”そんな勝手なイメージの JAZZ をなんとか融合できないかと考えたのが“テクノジャズ”でした。きっとものすごくカッコいいものになるんじゃないかと妄想を膨らませていました。でも、ジャズのジの字も掠ったことのなかったわたしにとっては結局何をどうしたらいいのやら全然分からないまま月日が流れていったのでした。でもきっとそんな気持ちこそがまさに“JAZZY”な気持ちだったんじゃないかな。よくわかんないけど。

（完）

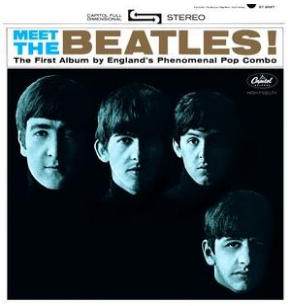
JAZZ？クロスオーバー？フュージョン？

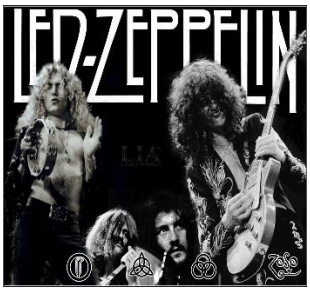
Satoru Negishi　　根岸　聡

１．私の音楽歴

20 年 8 月に秋葉原 BCL クラブに入会させていただきました。2018 年には「ABC50 ‘S」に“さるる”の HN で投稿させていただいたこともあります。せきやま☆れいわ氏の HP、「BCL は趣味の王様」はちょくちょく覗かせていただいていまして、20 年 8 月 15 日に開催されたオンラインミーティングに初めて参加しました。これを機会に BCL を復活させようと思っています（これで何回目の復活か？）。改めて「BCL は趣味の王様 2」のページを拝見していると「交流誌　あーゆぼーわん No4 で JAZZ に関する投稿を募集している」という一文を見つけました。そこで入会の挨拶代わりに投稿してみようと思ったのです。

とは言え私は JAZZ を本格的に聞いたことがありません。中学生のころからサイモン＆ガーファンクルから始まりビートルズ、レッド・ツェッペリン、ディープ・パープルなどのハードロックに夢中になり、その後ピンク・フロイド、キング・クリムゾンなどのプログレッシブ・ロックにはまり、高校生くらいからはブリティッシュ・ロック、アメリカン・ロックにはまって、大学時代にはロックコンサートに月一で行くくらいになっていました。今でも 70 年代、80 年代のロックの知識は相当あると自負しています。イントロを聴いただけで曲名、アーティスト名がほとんど出てきます。しかし私の洋楽歴 45 年の中には残念ながら“JAZZ”というジャンルはありません。





私の人生に大きな影響を与えてくれたアーティストたち

２．私の JAZZ のイメージ

中学時代からロックに夢中になった私ですが、JAZZ という言葉を知らなかったわけではありません。ただ私の JAZZ のイメージはこうでした

.

・黒人アーティストがスーツを着て、夜に暗い部屋の中で

トランペット、サックス、ウッドベースを静かに演奏する音楽

・白人アーティストが社交場で BGM 代わりに奏でる音楽

ボーカリストがシャウトし、ギタリストが弦をかき鳴らし、時にはステージ上でギターを破壊するようなハードロック、シンセサイザーを駆使し、幻想的なメロディーを奏でるプログレッシブ・ロックが好きな私にとって、上記のようなイメージがある JAZZ というジャンルが入り込む余地はありませんでした。ブルースというジャンルがありますが、ブルースのインストゥルメンタル・バージョンといったところでしょうか。今考えると恐ろしい思い込み、無知の極みですね。

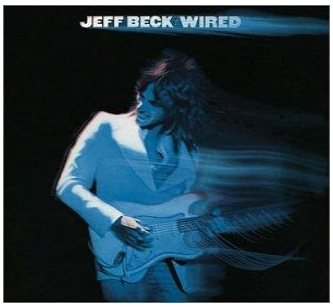
３．ジェフ・ベックは JAZZ？

中学生のころヤードバーズというバンドを聴いていました。60 年代を代表するブルティッシュ・ロックバンドで後に名ギタリストとして名をはせることになるエリック・クラプトンも在籍しています。もう一人天才ギタリストが在籍していました。それがジェフ・ベックです。中学時代に彼のギターを聴いたときには「こんな早引きが出来るなんて」という驚きを感じました。

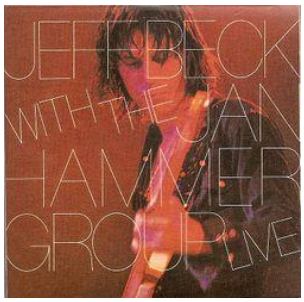
ヤードバーズ時代。一番左がベック

ストラトキャスターの使い手

彼が 1976 年にリリースしたアルバム、“Wired” を友人に借りて聴いたことがあります。当時、このアルバムは全曲インストゥルメンタルで構成され「ロックアルバムではなくジャズアルバムのようだ」と評され、事実ビルボードのヒットチャートではジャズ・チャートにランクインされています。私も聴いたときにこれまでの彼の音は違い、キーボード（奏者はヤン・ハマー）と彼のギターの絡みが絶妙の、これまでのロックとは一味違う印象を受けたのを覚えています。



名盤　“Wired”



後にライブ盤もリリース

私はこのアルバムが気に入りました。と同時に「これも JAZZ なんだ。これなら聴いてもいいな」と思うようになりましたが・・・これは JAZZ ではないとわかったのはもう少し後です。

４．クロスオーバー、フュージョンって何？

月日は流れ、大学時代になると私のロック熱はさらにヒートアップし、来日コンサートに行くためにアルバイトに勤しみ、授業をおろそかにする始末。当時人気のあったデュラン・デュラン、カルチャー・クラブ、ブルース・スプリングスティーン、などを聴きまくっていましたがある時、クルセイダーズというバンドの存在を知りました。ラリー・カールトンのギター、ジョー・サンプルのキーボードを中心にご機嫌なサウンドは一発で私のツボにはまりました。

代表作“南十字星”

当時の音楽雑誌などでは「新しいジャンルの音楽、クロスオーバー」といった表記がされていたと記憶しています。そもそもクロスオーバーという単語は日本語では「交差する」という意味で、ロック、ジャズなどが混合した音楽だと定義されています。ということはまず“ジャズ”があり、そこから“クロスオーバー”という言葉が発生したことになりますね。
さらに“フュージョン”というジャンルはこの“クロスオーバー”の後期の言い方だとか。
私がずっと思ってきた　ジャズ＝クロスオーバー＝フュージョン　という公式は完全に間違いだったのですね。

５．フュージョンを聴きまくる

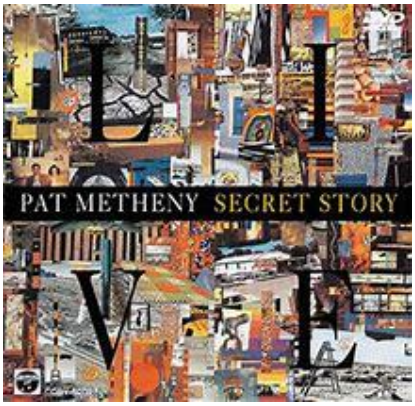
　ということでブルーノート・レーベルの本格的なジャズを聴くこともなくひたすらフュージョンを聴くことになります。ここで私が聴いたお薦めの作品を何枚か紹介します。

Herb Alpert　“Rise”

1979 年にグラミー賞を受賞した大ヒット作。タイトルナンバーの“Rise”は全米 1 位を獲得しました。彼の影響でトランペットを始めた人も多いはずです。昨年、アルバム「Over the Rainbow」をリリース。ビルボード誌のジャズ/コンテンポラリー・ジャズ･チャートで No.1 を獲得しました。

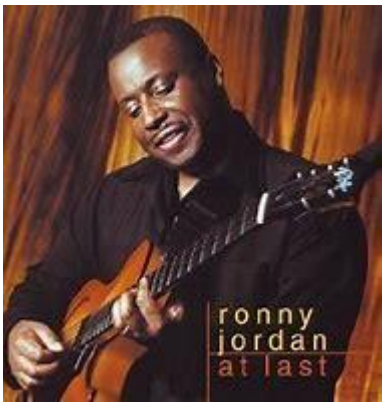
Chuck Mangione　“Feel so good”

フリューゲルホルン奏者である彼の代表作。タイトルナンバー”Feel so good”は大ヒットしました。トランペットは一味違うフリューゲルホルンの優しい音色に癒されます。



Pat Metheny　“Secret story”

グループとしても活躍している彼のソロ作品です。
シンセサイザーも多用し、フュージョンの枠を超えて聴きやすい作品に仕上がっています。第 35 回のグラミー賞を受賞しています。



Ronny Jordan　“At last”

NHK ラジオ番組「クロスオーバーイレブン」のオープニング・エンディングテーマに彼の楽曲が使われていましたね。2001 年リリースの” A Brighter Day”が一番有名かもしれませんが、私はこの作品のほうが好きです。6 年前に亡くなっていますが自殺と噂されています。

このほかにはウェザー・リポート、リー・リトナー（キャッツアイを歌った杏里さんと結婚した時には驚きました。でも離婚したんですよね）などを好んで聴いてました。日本のカシオペアや T-スクェアなども。伊東たけしさんが奏でるリリコンの音色は強く心に残っています。基本的にボーカルが入るのは聴かなかったのですが、ジョージ・ベンソン、新しいところではノラ・ジョーンズは聴きますね。シャカタクは 5 年位前に横浜の赤レンガ倉庫で開催されたディナーショウみたいなライブにも行きました。代表曲“Night Birds”は近くのスーパーの BGM としてよく流れています。

６．終わりに

なにか取り留めのない話になってしまいました。60 歳を目前にし、音楽を聴く時間も格段に減りました。もっとも最近の音楽はまだラップが幅を利かせているようで聴く気になりません（私はラップは西洋の踊念仏という勝手な定義をしています）。かといって「昔の名前で出ています」的な出稼ぎコンサートにも行く気になりません。You Tube で昔の音源を聴くのが最近の私のトレンドです。夜に自分の部屋でコーヒー片手に You Tube を見る、至極のひと時です・・・・が飲みすぎて夜中にトイレに立つ回数が増えてきました。歳は取りたくないものです・・・。

おしまい

「インドネシアの声」といっしょ

植村 昭男

出発まで

前回書いたベトナムの声訪問の１ヶ月前、RRI インドネシアの声とインドネシア観光省の共同主催「Wonderful Indonesia Quiz 2017」に幸運にも当選、6 泊 7 日のインドネシア旅行に招待された。その楽しかった旅行からもう早 3 年、今回は写真中心に振り返ってみた。

クイズは 2017 年 3 月下旬に出題、5 月 1 日締切、私は 4 月中旬に解答を送った。
過去の年は難問もあったが、この年はクイズと言っても局番組についての感想やインドネシアの印象を答えるアンケート的なもので難易度は低く、私にとってはその点、大変ラッキーだった。
「Wonderful Indonesia Quiz」は主にアジア、オセアニア地区の RRI リスナー向けに毎年開催。
招待者数が毎回 10 人前後と多く、特に日本人はかなりの高確率で当選するというリスナーにとって大変魅力的な企画だったが、残念ながら 2017 年限りで終了。
現在は全世界対象で招待者数 2～3 人の「VOI International Quiz」のみ開催されている。

局からのクイズ当選メールは 5 月 9 日に届いた。今回は 5 月 26 日から 6 月 1 日の日程でスマトラ島北部のメダン、トバ湖、サモシール島とジャカルタを巡るコースとの事。
この中には RRI 局舎とチマンギス送信所訪問も組み込まれているそうで、こちらも楽しみ。
程なくして日本語課 Ihsan さんから飛行機の E チケット、その他書類をお送りいただいた。

5 月 26 日（金）香港でトランジット

今回の旅はキャセイパシフィック航空利用、関西空港から香港経由でジャカルタ・スカルノハッタ空港に向かうという行程。
岡山駅西口を 10:20 出発の南海バス(私以外の乗客は 2 人だけ･･･)で関西空港へ。
13:00 過ぎに関空到着、カウンターでチェックインした後は 19:10 の出発時間まで航空会社ラウンジで遅い昼食を頂きつつ、のんびり寛ぐ。関空を定刻通り離陸し、22:10 に香港到着。

5 月 27 日（土）インドネシア メダン

0:20 に香港出発し、4:00 にジャカルタ到着。空港到着ロビーでこのツアーをアレンジした旅行会社社員 Dina さんが出迎えてくれる。入社 5 年目、日本のアニメが大のお気に入りでしっかり者の彼女はてきぱきと仕事が早く、滞在中、大変お世話になった。
しばらくして日本から参加の山形県の K さんと静岡県の H さん、中国からの参加者も集合。
K さんと H さんは羽田から出発。お二人ともお仕事は既に定年退職され、悠々自適の毎日を送られているとの事。K さんは以前このクイズに当選した BCL のご友人に勧められて応募、H さんは RRI 以外にも RTI や HCJB をよく聴かれているそうだ。

そして RRI 日本語課 Ihsan さんとも念願の初対面。以前から放送でお声を聴き、電話やメールではやり取りをしていたが、実際にお会いできて嬉しいかぎり。
局からはもう一人、ドイツ語課の Dora さんも旅行に同行、私達のお世話をして下さる。
この年の招待者は日本から私を含め 3 人、中国 3 人、インド 3 人、オーストラリア 1 人の計 10 人。
オーストラリアとインドの参加者はシンガポール航空利用で、夕方にメダンで合流との事。

早朝到着組が全員揃ったところで、空港内のレストランで朝食。
私はミーゴレン（インドネシア風焼きそば）を頂く。日本の焼きそばよりスパイスやにんにくの風味が絡み合った甘辛い味で、くせになる美味しさ。朝食を頂きながら Ihsan さんと色々お話しする。
Ihsan さんは RRI に 2015 年入局、日本のアニメ、漫画、ゲームが大好きで日本語を勉強したとの事。
お兄さんは漫画家をされていて、インドネシア各地の書店で著作が販売されているそうだ。
日本にはまだ行った事がなく、早く貯金をしてぜひ秋葉原へ行ってみたいと、日本への想いを熱く語ってくれた。

朝食後、7:50 発のガルーダインドネシア航空で最初の目的地メダンへ。
メダンは北スマトラ州都で、ジャカルタ、スラバヤ、バンドンに次ぐ第 4 の大都市。
10:00 すぎに到着、メダン中心部までバスで向かう。この日の昼食はインドネシア料理。
バナナの葉に盛り付けられたご飯やおかずを手で頂く。味付けはスパイスが効いていて結構辛め。
ちょうどラマダンの時期で、ムスリムの Ihsan さんや Dora さんは日中食事を摂らないそうだ。
この後は 14:00 からメダン・マイムーン宮殿とグランドモスクを観光。
マイムーン宮殿はこの地域を支配していたスルタンが住んでいた王宮で、実際に使われていた調度品、王族の歴史に関する資料が展示されている。玉座は豪華絢爛で眩いばかりの黄金色、実際に座る事もできる。離れには現在もスルタンの末裔が住んでいるそうだ。

グランドモスクは宮殿から歩いて数分とすぐ近く。荘厳な雰囲気ながら、南国らしい長閑な感じがする。モスクを見学した後は宿泊先のグランド アストン メダンへチェックインし、暫し休憩。私一人で泊まるにしては広すぎる豪華な 10 階にある部屋で、メダンの街並みが一望できる。
16:00 からはインドネシア伝統マッサージ店で 2 時間ほどかけて全身をマッサージしてもらう。バリのリゾートを感じさせる落ち着いたインテリア、そしてアロマのいい香りで、心身共にリフレッシュできた。

19:00 からホテル最上階のレストランで夕食。フレンチのコース料理でなかなか豪華。
ここで夕方到着したオーストラリア、インドからの参加者が合流し、招待者全員が揃う。
初対面ながら同じ趣味の者同士、あっという間に打ち解けてラジオ話が弾む。
私も向かい側に座るオーストラリア・ブリスベンから来た Michael さんと楽しくおしゃべり。
食事の後、近くのドリアン専門店へ行って、デザートのドリアンを頂く。
21:00 過ぎに行ったにも関わらず、地元の人達で大盛況。ドリアンをまるごと 1 個割ってもらいそのまま手で摘んで食べたが、新鮮なせいか臭みもほとんどなく美味しい。

5 月 28 日（日）ブラスタギ、シピソピソの滝

この日はホテルを 8:00 出発のため、6:00 から朝食。
ちょうど Michael さんも来ていたので、昨夜に引き続き朝から楽しくラジオ談義。
彼はブリスベン郊外の発電所に勤務、ARDXC 会員で今はパイレーツ局中心に楽しんでいるとの事。
スマホに保存している数々のパイレーツ局 QSL や ARDXC 会誌を見せてくれた。
日本にも来た事があり、寿司や天婦羅など和食も大好きな彼は、旅行中少しでも時間があると
愛機 TECSUN PL-660 で地元局を熱心に聴いていた。

ホテル出発後、11:00 に中華料理店で早めの昼食を頂き、ブラスタギ郊外のタマンアラムルンビニ寺院に行く。ここは 2010 年に完成したばかりの仏教寺院で、ミャンマー・ヤンゴンのシュエダゴンパゴダをそっくりそのまま複製し、この辺りでは有名な観光地だそうだ。
ここは完成間もない事もあり、昨日行ったマイムーン宮殿より鮮やかな黄金色。

次はブラスタギ中心部のフルーツマーケットへ。フルーツマーケットといっても土産物や野菜など何でも売られている大きな市場。私はインドネシア土産にスマトラコーヒーを購入。
インドネシアはバリのキンタマーニ、スラウェシのトラジャ、そして極めつけはジャコウネコの体内消化を経て収穫されるコピ ルアックも生産されるコーヒー大国。
帰宅後に飲んだスマトラコーヒーも深いコクと独特の苦みがあり、とても美味しかった。
買い物の後、シピソピソの滝へ。滝の展望台からは翌日向かうトバ湖の雄大な風景も眺められる。
楽しかった一日の最後、ホテルへ向かう時に見た湖いっぱい広がる夕日はとても綺麗。

5 月 29 日（月） トバ湖、サモシール島

この日はトバ湖とサモシール島観光。7:00 にホテルを出発、パラパット港に到着するも手配していたはずのフェリーが予約できておらず、別の小型船を急遽用意してもらう事に。
40 分ほどデッキ上でトバ湖の風景を楽しみながら、11:00 前にサモシール島到着。
サモシール島は世界一大きなカルデラ湖・トバ湖に浮かぶ淡路島くらいの大きさの島で、バタック族の文化遺跡がたくさん残されている。

インドネシア政府が「第二のバリ」にするべく力を入れているが、それにしては観光客が少なく寂れた感じ。素朴で風光明媚な所だが、高級ホテルや派手なアクティビティが無いせいだろうか。この日までツアーに同行する観光省の人も、私達のサモシールの印象をしきりに気にしている様子。島ではトモックの王陵、アンバリータの石椅子が並んだ遺跡、シマニンドのバタック家屋や伝統舞踊トルトルダンスを見学。伝統織物ウロスなどを売っているバザールもエキゾチックな雰囲気で面白い。昼食は湖畔にあるお洒落なペンションのレストランでインドネシア料理。

少し早めの 15:00 にはホテル到着し、19:00 から開催されるサモシール観光省フォーラムまで部屋で各自休憩の予定だったが、Ihsan さん、Dina さんから「せっかく時間があるし、湖で遊びませんか」との嬉しいお誘い。旅の疲れが溜まっている日本の H さん、K さん、インドの Pradip さん以外の皆でホテルの目の前の湖畔へ繰り出す。気持ちよさそうに泳いでいる Ihsan さん達を眺めつつ散歩。
浜辺で水牛を散歩させている子供に出会ったりと、まったり寛いだリゾート時間を満喫。
この日は皆でほっこり出来たこのひとときが一番楽しめた。夜にホテルレストランで開催されたフォーラムでは、サモシールの観光映像上映や地元の方のお話を聞きながら夕食を頂く。

5 月 30 日（火）RRI 訪問、ジャカルタ観光

早朝 5:00 にホテルを出発、車内で朝食の弁当を頂きながら空港まで 3 時間のドライブだが、道路の舗装が悪い所が多く、揺れに揺れる。途中、トバ湖展望台のあるドライブインで休憩。
最後に雄大な景色を目に焼き付ける。シランギット空港は小さいながらもターミナルビルが新築されたばかりで、とても綺麗。10:10 発のスリウィジャヤ航空でジャカルタへ。

2 時間ほどで到着するもジャカルタ市街は大渋滞。道路を埋め尽くしている車のほぼ全てが日本車。
Ihsan さん曰く「インドネシアでは故障が少なくて性能の良い日本車が断然一番人気」との事。
14:00 過ぎに昼食を頂き、RRI には 16:00 前に到着。早速、局舎前で記念撮影する。
局の貴賓室で歓待頂いた後は、大ホールでの招待者歓迎ディナーパーティーで局長自ら私達一人一人に挨拶して下さる。その後はジャカルタ首都圏向け FM 放送 RRI・PRO3 のスタジオ見学。
DJ の方からインタビューをさせてほしいとの事で、ツアー参加者の中でも最強の DXer トリオ・ARDXC の Michael さん、IDXR の Prithwiraj さんと Pradip さんの 3 人が出演。
インタビューの模様は後日放送するそうで、聴く事ができず残念。

収録後はジャカルタ旧市街のコタ地区へ。オランダ統治時代の古い町並みが残っているこのエリア、私達が行った 21:00 過ぎでも地元の人達で賑わっている。バタビア時代の政治の中心だった旧市庁舎（現ジャカルタ歴史博物館）周辺を散策。食べ物や雑貨など多くの露店が出ている旧市庁舎前広場は混沌とした東南アジアの雰囲気が感じられる。次回は昼にもぜひ訪れてみたいところ。

5 月 31 日（水）チマンギス送信所、RRI 日本語課訪問、帰国

旅行最終日はチマンギス送信所へ。7:30 にホテルを出発、昨日と同様、道路は大渋滞で、11:00 に送信所到着。広大な敷地に見渡す限りアンテナで実に壮観。まず会議室で送信所についての説明。送信所長に日本語放送の受信状態改善をお願いするも、故障で送信方向を日本へ向けられず修理したくても予算が無いので無理との残念なお返事。その後は 2 時間かけて所内を見学、本当にあっという間の楽しい時間だった。帰国後しばらくしてチマンギス送信所閉鎖のニュースがあったが Ihsan さん達日本語課スタッフも突然知らされたそうだ。

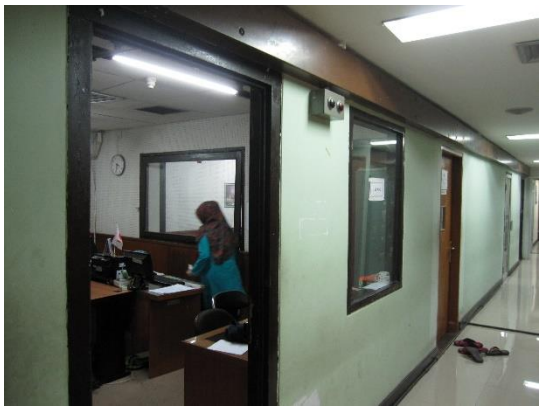
VOICE OF INDONESIA
CABANG KHUSUS SLN
PEMANCAR CIMANGGIS II

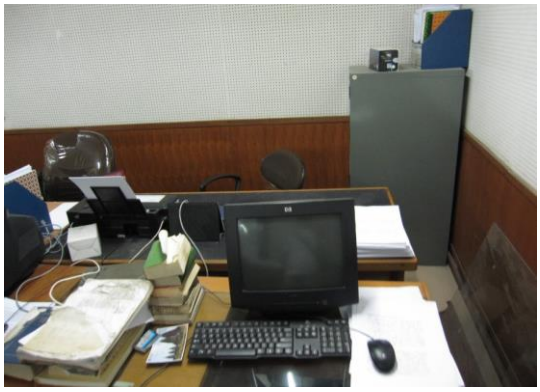
LUAR NEGERI RRI
VOICE OF INDONESIA
SUARA INDONESIA

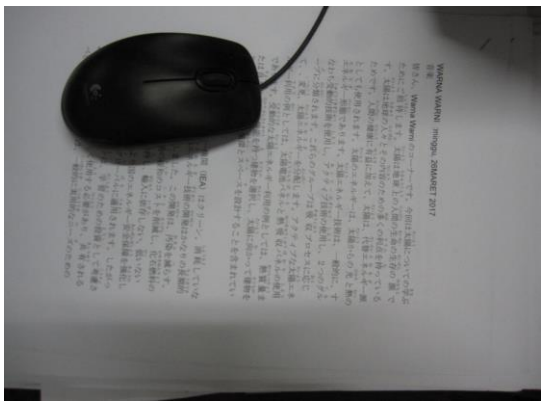
昼食はジャカルタ中心部のインドネシア料理店。一足先に帰国するMichaelさんやPradipさん達
オーストラリアとインドからの4人とは、この昼食が終わると残念ながらお別れ。
この5日間、一緒に旅行した仲間同士、皆、名残惜しそうに食事中もあちこちで写真を撮り合う。

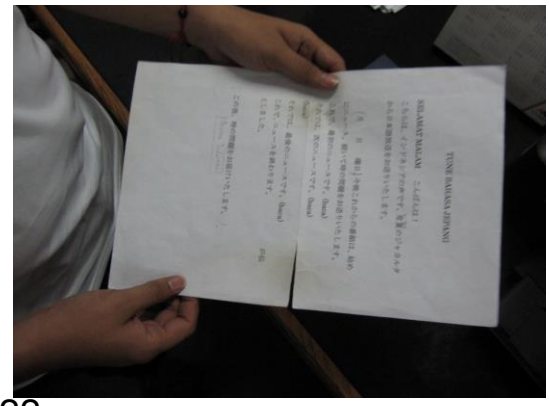
店の前で4人を見送り、RRIへ向かう。この日は昨日行けなかったそれぞれ聴いている言語課を訪問。
私達日本からの3人は念願の日本語課の部屋へ行き、日本語課長Endahさんにご挨拶、温かく
出迎えて下さる。Ihsanさんが放送原稿や昔の日本語課写真、リスナーからの手紙を見せてくれたり
と課内を案内してくれる。部屋は課員それぞれの机と書棚があり、思っていたほど広くなかったが
ここで制作された番組を聴いていたと思うと何とも感慨深い。
受信困難で聴き難い日本語アナウンス、局サイトの番組アーカイブ聴取も不調と問題山積のRRI
日本語放送だが、そんな中、今までよく継続してくれたと感じる。少ない人員、予算で毎日1時間の
番組制作は本当に大変だと思うが、少しずつ問題点を改善しながらこれからも日本語放送を続けて
ほしい。ひと通り見学させていただいた後は、Ihsanさんが隣のスタジオで私達にインタビュー。
インドネシア旅行や番組の感想についてお話する。放送日が決まり次第連絡下さるとの事だったが
結局放送される事はなく残念。2日間、訪問した局内はとてものんびりした雰囲気だった。

RRI
WORLD SERVICE
VOI
VOICE OF INDONESIA
Informing - connecting - dignifying
SW 9525 - SW 11785 - SW 15150
www.voi.co.id
indonesia.rriworldservice.com
english.rriworldservice.com

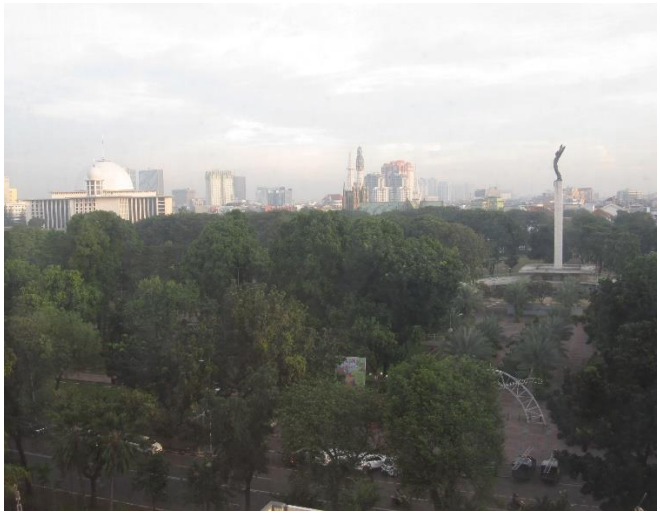








2 時間ほど日本語課へお邪魔した後は、市内で専用レーンを走るバス・トランスジャカルタに乗って繁華街の大型スーパーで買い物。私もクルクプといったインドネシアのローカルスナックなどを購入。インドネシア最後の夕食はここのフードコートでのミーゴレン。
この後いったん局へ戻り、ここで Dora さんとお別れする。22:00 に空港へ到着、ここまで一緒に来てくれた Ihsan さん、Dina さんと写真を撮り合う。今や RRI 日本語課の中心的存在となった Ihsan さん、これからも日本語力に磨きをかけながら頑張ってほしい。2 人のおかげで本当に楽しい 5 日間だった。招待頂いた RRI、そしてお世話になった方々に厚く御礼申し上げたい。
帰途も来る時と同じ香港経由のキャセイパシフィック航空。翌日 20:00 過ぎには無事帰宅した。



スマトラ島北部のサモシール島とトバ湖は、日本人にとってジャワ島やバリ島のような有名観光地でなく馴染みは薄いが、なかなか行く機会のない場所に旅をさせていただけ良かったと思う。
派手さこそないものの、インドネシアの他の観光地とはまた違った魅力があると感じた。
そのうち観光客で賑わう日も近いのではないだろうか。インドネシアの人達は何事にものんびりしているせいか、スケジュールどおりのスムーズな旅行ではなかったが、そういう点も含めインドネシアという国を感じる事ができ、私にとって格別な旅行となった。
このインドネシアを共に旅した仲間達は、今でも近況をメールや SNS で知らせてくれる。
中でもインドの Adita さんはイギリスの Radio User 誌への寄稿やアメリカ新婚旅行での VOA 訪問と昨年結婚してからもますます BCL を楽しんでいて、こちらまで嬉しくなる。

RRI 日本語放送は残念ながら短波での受信状態が悪い為、局サイトからのストリーミングで聴く事が殆どだが、今でも旅行を思い出しつつ楽しんでいる。またインドネシアに行ける日を夢見て。

インドネシアの声　日本語放送

・放送時間と周波数　21:00～22:00 JST ･････････3325kHz、4750kHz
・お便りの宛先　Voice of Indonesia, Japanese Section
Jl. Merdeka Barat 4-5, JAKARTA, 10110, INDONESIA
・受信報告書の注意　IRC 2 枚を同封　　返信はかなりムラがある
・受信状態　受信は困難　　3325kHz は 3320kHz 平壌放送の混信が激しい
・局ホームページ　http://voinews.id/japanese/
ストリーミングで 21:00～22:00 JST に日本語放送を聴く事ができる
オーディオアーカイブの過去の放送はエラーで聴けない事が多い
・E メールアドレス　voijapaneseservice@gmail.com
日本語 OK だが、最近はあまりメールチェックされていない模様
・番組紹介　毎日：ニュース、時の問題（日曜日：今週の問題）、今日の歴史、
インドネシアク、パソナインドネシア、音楽の広場
番組の間にインドネシア音楽
月～水：インドネシア語講座
木～日：ワルナワルニ
この他、日曜日にジャカルタ便りが放送される事もある
・日本語課スタッフ　Endah さん　日本語課長
Ihsan さん　2015 年入局、主に月～水、土、日曜日の番組と返信業務担当
Enggar さん　2015 年入局、インドネシア語課兼務、主に水～金曜日の番組と
インドネシア語課の番組「GuratanPena」担当
Sasi さん　フリーランスで 2017 年入局、土～日曜日の番組担当
その他、水、金曜日にボランティアで原稿チェックする現地在住の
日本人女性 4 人がいる

左：Enggar さん、右：Ihsan さん

Sasi さん

土曜の朝は JAZZ で目覚め、弁当作り。

朝の JRT 四国放送「ウィリアムス浩子の My favorite JAZZ 」を聴きながら弁当を作りました。今日は "Dexter Gordon" 特集でした。

AM とは思えないほど音質が良いので Collins 51S-1 の写真をアップ！

さて今日の弁当は山に行って食べます。少し野菜多め、玉子焼きは集中力が欠けて失敗でした。

by Vic

えぃみぃの楽しいジャズライフ

by えぃみぃ

～えぃみぃがジャズと巡り会い今に至るまでのお話はぁじまりはじまりぃ～

○ 歌手になるって？バッカじゃないの(笑)

小６の時。
卒業間近になるとみんなに書いてもらうサイン帳に将来の夢『歌手になること』と書いている女子がいた。女の子がマイクを持って歌っているイラストに吹き出しで「○○ちゃんは将来歌手になるのら❤」と書かれていた。
はぁ？歌手に？歌手になりたいって？バカじゃね？(笑)
えぃみぃの中では歌手ってそんな程度のものだった。
そんなえぃみぃの将来の夢は『**詩人になること**』だった(人のこと言えねーなオイ)
ちなみに親にラジオ（ICF-5900）買ってもらったのがこの頃。

○ 中学校では陸上部

えぃみぃの家の方針として「運動クラブに入ること」というのがあった。
小学校の時に姉が入っていた陸上部にまねっこで入っていたえぃみぃ。
しかし中学校には科学部という文化部があって、BCL ができるという情報が！
ぬわに！学校のクラブで BCL やってええのんか！！
先生がアマ無線の免許をもってて、当時流行っていた BCL も活動の一つになっていたのだ。
早速親に科学部に入りたいと言ってみたがあっさり却下。
で、さっさと諦めて陸上部へ。

○ 高校ではフォークソング部

テキトーに決めた高校は坂の上の女子校だった。
陸上部は無く、親も高校からは運動部以外でも OK ってことで文化系のクラブに入ることに。席が隣の子と仲良くなってフォークソング部に一緒に入部。
入部したときは自分のギターも持ってないしギターの弾き方も知らなかった。

ギター持っててちょっとだけ遊びで弾いてみてた他の部員について行けるようにめっちゃ練習していろんな曲を弾き語りできるように(^-^)
そして真面目なだけがとりえのえぃみぃは部長を押しつけられた。
フォークソング部は楽しくお菓子を食べながらおしゃべりするサボリ部だったけど、ここで歌う楽しさを覚えたのだった。
そして思った。
アタシ歌手になる(≧▽≦)←バカだなぁ（笑）

○ 彼氏はバンド君

その後特に歌とは無縁のとこに就職（見た目重視の性格のためデパガになった）。
そしてヲタクな JK だったえぃみぃもいっちょまえにバンド君と付き合っていた。
実はバンドやってる彼のファンになったとゆーわけではなく**ラジオ友達だったツレとなにげに（なぜか結婚前提で）付き合ってみたらバンドやっとった**、という感じだった。彼はドラマーで、毎週のように週末はバンド練習やライブ参戦。
せっかくの週末なのにデートも出来ずヒマである（ラジオ聞けよ）。
そうだ、自分もバンドするっちゅーんはどうだろう。
おんなじスタジオで練習してその後合流してデートできるし♪（そこかい！）
と、思いついたもののそもそも楽器はギターでコードジャラーンで歌うだけ。
歌だってオリジナルを作ったこともない。うーんどうするか。
じゃぁ歌上手くなって、誰かに作ってもらった曲を歌うってのはどうだろう。
よし。そいじゃ手っ取り早くボーカルスクールで仕込んでもらおう。
なにげに電車の吊り広告見てたら『ブルーノートジャズミュージックスクール開校！！一期生募集』を見つける。ジャズか。なんかカッコええな。これにしよう！と即決。
バブルの時代で入学金 20 万円、月謝 2 万円（５０分レッスンを月 2 回）。
道楽の始まりである（本人いたって本気）
･･･ジャズボーカルを始めるきっかけはこんな些細なことだったのでした。
彼氏のおかげともいえるな。感謝。（しかしラジオはここですっ飛ぶ）

○ プロにしてもらおーっと^▽^ｷｬｯｷｬｯ

さてレッスン開始。
先生「好きな曲を選んで持ってきてください」
生徒「どんな曲でもいいんですか？」
先生「スタンダード何か選んで持ってきて」

ん？スタンダード？持ってくる？いきなりわかんない（@▽@；ｴｰﾄ
その時「先生！スタンダードって何ですか？」とひとりの生徒が質問した。
なんだぁ、結構わかんないヤツいるじゃん！
ほっと（無い）胸をなで下ろすえぃみぃ。

そして先生は**「昔の映画の曲や！」**という超ざっくりとした説明をする。
「ジャズスタンダード全集」みたいな本が本屋で売ってるからそこから選んで

自分で譜面書いてきて。

ガーン！まさか譜面を自分で書かんならんとは・・・orz。
しかし本格派っぽいので通い続けることにした。
他の学校を調べたら譜面など不要な教室もあったかもしれない（知らんけど）。
だけど続けることにした理由は・・・
・ブルーノートという本格派ジャズライブハウスの学校である！
・しかも一期生ってなんかええやん！！
・先生は関西で第一線で活躍中の若手ミュージシャンが勢揃い（知らんけど）！
・プロ志向（電車の吊り広告に記載）← “プロにしてあげる” という意味と勘違い

なにより自分の歌はイケてると思っていた（そうでなければ人前で歌おうなどと思わないだろう！）。よし、ここでプロに育ててもらおう（無知は最強の武器）。
そんなゆるぅいジャズの始まりでした。

○ 武者修行なさったら？

同期の中にプロで歌ってる子がいた。
その子に「どうやってプロになったの？」と聞いてみた。
他の学校でプロになったんなら何故ここにいるのか。そもそもプロになれば学校は卒業じゃないの？
お店に直接行って歌わせてもらった、というような内容だったと思うがよくおぼえてない。
その子は言った「えぃみぃさんも武者修行なさったら？」
そうか。学校で自分が歌う曲楽譜に書いて持ってきてるし、これ持ってお店に行けばいいのか。楽勝じゃん！（無知は最強の武器）
すっかり武者修行→プロ→メジャーシンガーという完成形を思い浮かべてうっとりする夢見る夢子ちゃんだった。

○ 学校すぐ閉鎖。やだ！プロになれなくなっちゃった（T-T）

開校から 2 年経たないうちにブルーノートミュージックスクールは閉鎖。
バブルがはじけちゃったからね。
やばい！どうするえぃみぃ。プロになれなくなっちゃうよ！！
そこで思い出したのが『武者修行』。
ついにその時が来たのだ！
行ってみたのは当時神戸の中山手にあった『サテンドール』というライブバー。
「武者修行なさったら？」とえぃみぃに言った彼女も出演している店だった。
自分にみょーーな自信があったえぃみぃ。いきなり「歌わせて欲しい」というとお店のマスターは快くオッケーしてくれた。

20 代前半の勘違い女子。歌も相当酷かったろうに、マスターはまた歌いに来ていいよ、と言ってくれた。そしてなんだか客にモテモテ。勘違いえぃみぃは自分の歌にますます自信過剰になっていったのでした。

○ ついにキレられた

そして何回か通ったある日、ついにミュージシャンに怒られてしまった。
「こんな落書きみたいな譜面持ってきて歌もでたらめ、学芸会ちゃうねんで！
プロの先生にちゃんと譜面みてもらって出直してこい！！」
えぃみぃズタボロ（T-T）（ビビってここで武者修行は終了。）
慌てて学校でレッスン受けてた先生に連絡。先生の自宅での個人レッスンが始まった。
譜面のチェックをしてもらって、自分の歌を録音してもらって、練習用のカラオケを作ってもらう。月に 2 回。延々繰り返される日々。
ある日「先生、いつになったら歌手になれるの？」となにげに聞いてみた。
すると先生はこう言った
「へ？おまえプロになりたかったんか？」
ってガーン。
それは衝撃の言葉だった。
てか、プロになりたいという以外にレッスンを受ける理由あるんか？と思った。
先生は言った「プロになろうと思った時に自分で決めてなったらええんや」。
ってまたまたガーン。
育ててもらってプロにしてもらえるんじゃなかったのか（やっと気づく）。

○ そしてけーこピーと･･･出会ったーー(ウルルン風)

さて以前は武者修行という手段しかなかった(と思う)けど、その後ボーカルセッションってのがあっちこっちで開催されるようになって、気軽にジャズボーカル勉強中の方々が参加してプロの演奏で歌える時代に突入。いい時代になったなぁ＾＾
そして歌いに来たボーカル女子さんと顔見知りになって、ライブを一緒に聞きに行ったり、ボーカル女子さんのライブ応援に行ったり、プロのミュージシャンに「おぅ！えぃみぃちゃん聞きに来てくれてありがとぅ！今度一緒にライブやろなぁ＾▽＾」なぁんて声かけられちゃったりして「キャッ❤なんかプロみたぁい(o´∀`o)」といい気分なえぃみぃ。

○ 酒と薔薇の日々

ある日酒が好きなえぃみぃはジャズライブハウスに「お勉強」という名目で呑みにいった。そしてその店でライブ出演していたけーこピーと出会った。けーこピーはジャズ以外にも様々なジャンルに挑戦するピアノ女子で、その日は『二カの夢』というナンバーを超スローで演奏していた。これまでジャズはCDで聞いてまんま練習することが多かったので、「今日は超スローでやってみましょうか。やったことないんでどうなるかわからないんですけど、面白そうなんで挑戦しましょう！」それは新しいおもちゃを見つけたようなワクワク感でしたｷｬ

そのけーこピーにライブで歌わないかと誘われた。
彼女がいつも演奏しているメンバーにボーカルをゲストに呼んでライブするというもの。
その時「せっかくだからスキャットしませんか」と言われ、テキトーにやってみたらチョー楽しくてハマった。
しかしスキャットはジャズ好きの中でも好きな人と嫌いな人の差が激しく、さらにスキャット好きな人は「スキャットたるもの･･･云々」みたいなのがあって「我流でやんないでください！」とか「あなたのはスキャットじゃないですね。」などと説教（っつーかいやみやね）されることもあって、えぃみぃは自信喪失。
誰にも文句を言われない完璧なスキャットをするべく（またしても）教室に通おうかなとか色々悩んだけど金欠のため断念(- -;;;
でもさ、やっぱスキャットって自分で好きなように演じるのが楽しいよー
いろいろ考えてたら鬱になっちゃいそう。。

○ ユニットさまならやぁ

そんなとき「思いっきり好きなライブをしてみては？」と定期的なライブの機会をいただいた。当時神戸にあった『ホリーズ』というライブ＆レストラン。セッションやライブ応援（という名目の呑み）でちょこちょこ通っていた店。
いやー通うもんですねぇ
早速メンバーを決めた。ピアノはけーこピー。ベース・ドラム・サックスのメンバーとえぃみぃのボーカルジャズユニット『さまならやぁ』の出来上がり。
『さまならやぁ』とはシンハラ語で「蝶」のこと。スリランカとちょうちょが好きなのでこのユニット名にした。
おかげでえぃみぃは大暴走！好きな曲を好きなように歌う。チョー楽しいんですけど！！

だけどレパートリー増やすもマニアックな曲やアレンジがたくさん入る曲ばっかりやってて王道のレパートリーが少ない･･･そんな変態ライブが何年か続いたある日・・・

お店が閉店となりました Σ(@▽@；ｶﾞｰﾝ

さぁ大変！えぃみぃのライブの場が消滅。どうするえぃみぃ。
お店がなくなって次のライブをする店が見つけられない。
お店なんかいっぱいあるもん！と思ってたけど、じゃあ何人呼べるんですか？
ってところですでにアウト（≧△≦）←客呼べない人
ライブの予定がないと･･･ボイトレも持ち歌のブラッシュアップも新しいレパートリーの練習もなぁんにもやる気にならない･･･もぉ歌えないよぉ(ToT)
予定がないのに練習できるってすごい才能だね！アタシ才能ないのかな･･･
いっいやいや！思い起こそう JK の頃を！フォークソング部(という名のたまり場)を！何の迷いもなくめっちゃ練習していた真面目なだけがとりえの部長さん時代を！･･･と、とりあえず歌っとこか（＾＾；
そして時々けーこピーや関西のお友達ミュージシャンからライブの機会をいただきつつ今にいたるのでした。

○ 勝手に BCL との融合

ところでえぃみぃのスリランカ好きのはじまりは BCL でスリランカ放送協会（SLBC）の日本向け日本語放送を聞き始めたところからでした。
その BCL を最近ちょっとだけまた始めています。
復活を決めたのは2018年、代々木公園のスリランカフェスティバルで秋葉原BCLクラブ代表（BCL 女子部元締め）のせきやま☆れいわ氏に中華ラジオの話を聞いた時でした。（↓まいどおなじみの写真）

てなわけでスリランカと BCL がええ感じでシンクロしています。

この流れで BCL な方々と SLBC 元アナウンサー岡田陽子女史に会いに行くツアーもやらかし･･･

ますますスリランカと BCL ががっぷりよっつｗｗ

さてそんな中、今年（2020 年）も秋葉原 BCL クラブの地方都市での集い「神戸ジャズと BCL の集い vol.2」をしようということになり、関西支部メンバーで準備することになりました。
昨年同様ジャズライブハウスへみんなで行く予定でしたがちょっと待てよ･･･と悪だくみ。

ワシのライブするってどーよ（≧▽≦）ｷﾞｬﾊ

スタジオライブで BCL なサックスプレーヤー氏とけーこピーとワシの歌で弾けようｳｯｼｯｼ。
BCL とジャズの融合や！！

そして･･･今回は残念ながら中止になってしまったけれど･･･
まぁまた機会があったらライブしたいね。
だってさぁだって･･･衣装だって準備してたしぃ（そこかい！）
ここんとこサリーが衣装の定番だったのですが、この日のためにえぃみぃは
ピッタピタのボディコンな衣装を用意していたのでした。
調子に乗りすぎてばちが当たったのかしら（≧△≦）

←張り切りすぎ衣装（イメージ）

↓ポスター作ってもらってテンションＭＡＸ→どん底へ

○ そしてすずきさん

兵庫県芦屋市にあるライブバー『すずき』。
ここはけーこピーがセッションリーダーをしている日にえぃみぃが譜面を持っていそいそと歌いに行ってるお店。
今のところえぃみぃが歌っているのは『ここだけ』。
いっぺん『ここだけ』でひどい目にあったのに（つーかおめーがつぶしたんじゃねーだろーな）、えぃみぃの性分でどうしても一つのお店に落ち着きたがる。
一途とゆーか（違うでっ）まぁそーゆー人がいたっていいじゃん。
マスターの鈴木さんはお酒好き。
初めて行ったときハイボールを頼むと「私はお酒が好きなんで、ついつい濃いめに作ってしまうんだけど、えぃみぃさんは濃いめ大丈夫？」と聞かれた。
「はい！めっちゃ大丈夫です！」というわけでいつも濃いめのハイボール作ってもらっている。
さらにビールは生より瓶が好きなえぃみぃだが、ここは瓶ビールしかない。
しかしながら中瓶一本呑むにはちょっと多いかなという時は「てつだおか＾＾」と、半額でマスターが半分呑んでくれる（笑）
せっせと通っていると「晩ご飯食べてからくるんやったらお弁当持ってきて食べていいよ」、と言われた。
えぃみぃ「あのぉ、おつまみとかでもいいんですか」
マスター「ええよ。好きなもん持ってきぃ」
というわけで、えぃみぃのおつまみの定番、いかりスーパーのローストビーフを持参してここでくつろぐ事が楽しみの一つとなっている。
注 1）あくまでもメインはセッションです。
お客様が少ないときは歌いまくり＆ローストビーフとビールでほろ酔い。
行ってみてお客様いっぱいの時はちょっとひんしゅくかなーとか思いながらもやっぱりそこそこ歌いまくり＆ローストビーフとビールでほろ酔い。
これがローストビーフじゃなくてスペアリブとかだったら『酒とバラの日々』だなぁ＾＾なぁんてとろーんと考えながら他の人の歌や演奏を聞くのは楽しい。
注 2）あくまでもメインはセッションです。
ところで実はここ、ライブスペースの他にセミナールームもありまして。
ここで昼間はミーティング、夕刻からライブなんていいんじゃない（＾～＾）
そんなこんなでジャズと BCL とスリランカが渾然一体となっているえぃみぃ。
これからもジャズをいろんな形で楽しんでいきたいなぁーと思ってます（＾＾）
みなさま、ゆるぅく一緒にジャズいたしませう♪

お・わ・り

ジャズ耳を鍛える　　今井　靖

洋楽への旅先案内人はベイシティローラーズだった。フリントロック、バスター、ロゼッタストーンも案内人の仲間であった。私が中学三年生の頃だ。吹き荒れるタータンハリケーンに訳もわからず巻き込まれてしまった私は、夢中になってテレビや雑誌から彼らの情報を手に入れる。当時、まともなラジオは家には無い。模型屋で買った数百円の一番安いゲルマラジオは手元にあったが、聴き続けると猛烈に疲れて意識が飛びそうになるのでお蔵入りとした。父が高性能であろう東芝のトランジスターラジオを持っていたが、それは壊れていた。ベイシティとその仲間達こそ、本物のイケてる最新の洋楽だと信じて疑わない私に「それは違うな、今井君」と教えてくれる者は廻りに誰もいない。洋楽に通ずる父や兄貴でもいれば修正は容易だったろうが、私こそ長男だし妹はキャンディーズに夢中だし。同級生と音楽の好みについて語り合った記憶も不思議に無い。何故だろう？競争を勝ち抜くべく皆、一心不乱に勉学の研鑽に打ち込んでいたからなのか？いや、確かに父は筋金入りのオーディオマニアではあったのだ。古いビクター製手廻し式蓄音機に、厚くて重たいコロムビアのレコードなどを載せては、戦前の軍歌や当時の流行り歌を聴いていた。残念なことに蓄音機のメカニズムや、部屋から漏れ伝わるノスタルジックなサウンドに興味を持ち、ラッパの前で父と一緒に耳を傾けるほど私はまだ枯れてもいなかった。しかし、同級の女子とは何人かとベイさんの情報交換でよく話をしたものだ。「きのう放送したロックンロールラブレター、かっこいいよね」なんてね。そういう余禄は確かにあった。

目覚めるきっかけは、名の通ったメーカーとは一線を画す安いラジカセを買ってもらったことだ。商品名はＢＵＢＵだかＢＵＢＵＫＡだったか？違うな、ＢＵＢＵＫＡはコンビニで見かけるえげつない雑誌名だ。とにかく愛機ブブちゃんを手に入れた私は、ようやくにラジオとお近づきになれたのである。ベイさんに関する記事を読むとしばしば「ローラーズはビートルズを超えるのか」といった論を目にした。ビートルズは知っているさ。「たったワンステージで１００万ドルを稼ぐ」「女王様から勲章を戴いた」「テレビ出演で視聴率７０％」「手を振るだけでティーンエイジャーは鼻血か失神」などの強烈なエピソードの数々。ただ、テレビでは観たことが無かったしレコードも無いので、気にはなるけどよくは分からないイギリス人達の認識だった。ブブちゃんを手に入れてしばらく経ったある日、ビートルズの最新アルバム「ラブソングス」発売に合わせて、ＦＭで特集番組が放送されるのにこれはよい機会だとエアチェックをした。彼らの紡ぐ曲があまりにも豊穣な事実に心の底から衝撃を受けてしまった。西村賢太風に書けば、もうベイシティローラーズとその仲間達には 慊(あきたりな)い、まったくもって 慊(あきたりな)いの

だ。それからの私はラジオ欄を隈なくチェックする毎日。[ビ]の文字が目に留まれば、ずうとるびだろうが東京ビートルズだろうが聴きまくった。少年から青年へと脱皮を始めた私に、ベイシティの諸君とお別れする時が来てしまったのだ。悲しいが受け入れなくてはならない。その後には彼らの辿った道も消息も知らないのだが、義理堅い私は今でもＭＤを持っている。「ザ ベスト オブ ベイシティローラーズ」ＴＳＵＴＡＹＡで借りてダビングした。今でもたまに聴く。いや、まれに聴く。彼らの音楽を聴くたびに、私は甘酸っぱかったあの頃の残滓を噛み締めるのだ。

高校受験を終えて進学先が決まった時、両親からついにソニーのステレオコンポを贈られた。親戚のおばさんも進学祝いに何かを買ってくれるというので、迷わずビートルズの青盤をリクエストした。祖母も買ってくれるというのでこちらは赤盤をせがんだ。初めて手に入れた新品レコードの香りにうっとりしつつも針を落とせば、部屋の隅々にまでビートルズサウンドが渦を巻く。本当にステレオだから感心した。ブブちゃんのワンウェイスピーカーはショボかったもんなあ。それからはバイトで稼いだ小遣いで、ビートルズのＬＰを買い集めることとなる。私にとってレコードと同じぐらい重要なのはライナ—ノーツだ。当時の世相やロックのミュージックシーンなどはここから学んだ。ビートルズを語ればライバルは誰？という話になるが、衆目の一致するところではローリングストーンズなのだそうだ。ビートルズのアルバムをほとんど手にした私は、ここで終わるとせっかくに用意したレコード棚がスカスカなので、次のターゲットをストーンズへ狙いを定めた。大ヒット曲は「サティスファクション」この曲が入っているグループ初期のベスト盤を試しに買い求める。聴いてすぐに驚いた。音が悪くて。ビートルズのレコードと比べたら明らかに録音が悪いのである。「オリジナルはモノラルですが疑似ステレオ化しています」とあるも、全くステレオには聴こえない。しかし、それを補って余りあるほど曲はストレートで力強かった。ブラックでクールだった。上品とは間違っても言えない歌詞も、彼らのキャラクターもツボに嵌った。ビートルズとは全く正反対の魅力にノックアウトされたのである。タイミングも良くＬＰ一枚が 2,500 円の時代に、ロンドンレーベルの初期ストーンズＬＰは出血大サービスの一枚 1,500 円。浮いたお金で煙草も買える。酒はまだその魅力が分からない１７歳になる頃だ。

６０年代のビートルズやストーンズの音楽が米国に対する英国の侵略と呼ばれて、インヴェイダーにも仲間達がいることを知る。乗り掛かった船とばかりに彼らのＬＰも手に入れた。アニマルズ、フー、キンクス、ハーマンズハーミッツ、ヤードバーズ、ゼム、ニッチなところでゾンビーズ、エトセトラえとせとら・・・。７０年代でも無い、目前に迫る８０年代でも無い、６０年代の怒れる若者達を代

弁するブリティッシュロックの虜になった。代弁しない曲もたくさんあるがそれはそれで好きになった。この頃になると洋楽ロック好きが廻りにはたくさんいたが、彼らはレッドツェッペリン、ディープパープル、キッス、クイーン、エアロスミス、チープトリックなどに夢中で嗜好がどうにも合わない。「そんな昔の聴かねえよ、誰だよそれ、どこがいいのよ」と半ば変人扱いされる始末。しかし、黄金のブリティッシュ６０ｓに誇りを持つ私には、いささかも揺らぐ柔なハートは持ち合わせていない。前世は高確率でバーミンガムかマンチェスター辺りの頑固職人だったと思うほどである。齢を重ねればそりゃあ、いろんな音楽を聴くし、手元にＣＤだっていつの間にやら増えてしまう。ついこの前にも好奇心からゴーゴーズやジッタリンジンのＣＤを買ってしまったが、思ったよりもぐいぐいと聴かせてくれるので、良い買い物が出来たと大変満足しています。ユーチューブとヤフオクがいかんのだよな。でも、私にとっての絶対的な四天王は、永遠にビートルズ、ストーンズ、フー、キンクスだ。無人島に一つだけ持っていくなら何？と問われたら迷わずにこう言うだろう。「音楽だけでいい、他は一切要らない。しかしその為には上記４グループのＬＰ、ＣＤ、ＭＤ、対応するオーディオセット各種、発電機、オイル、ガソリンの詰まったドラム缶数本、灯油チュルチュルと長目のホースが必要だからそれは認めてくれ」と。我が肉体にピリオドが打たれるその時が来るまで「彼氏になりてえ、あ～抱きしめてえ～♪」だの「何をやっても満足しない、満足しないぜ～♪」だの「若いうちが華よ、老いぼれる前にくたばるのさ～♪」とシャウトする、やんちゃで野放図な歌を喜んで聴き続けるであろう。

　正直に告白すればジャズには興味を持てなかった。喰わず嫌いというだけでは無いと思う。右半球の大脳に何か欠落するものがあるのではないか、と薄々感じている。聴いても特に心が動くことも無いし、ムーディーなＢＧＭとしか捉えられ無い。知っているのは「Ａ列車で行こう」だけ。バブルの頃に一度だけ、高円寺か阿佐ヶ谷のジャズ喫茶に行ったことはある。見るからに高価なスピーカーから流れる曲に客は無言で腕組みし、眼を瞑り、貧乏揺すり一歩か二歩手前の動きをしている。旨いコーヒーを啜りつつ、備えてある洒落たカルチャー雑誌をパラパラと捲りながら〝雰囲気はともかく、ここは居場所では無いな〟と私はおぼろげに感じたものだ。「ラ・ラ・ランド」や「セッション」などのジャズをテーマにした映画を観ても、ストーリーの展開や演技、カメラワークには注意を払いつつ音楽には払わない。筒井康隆著「男たちのかいた絵」は各タイトルにジャズのスタンダードナンバーが振られているが、曲を全く知らずとも筒井ワールド全開の内容で面白かったなあ。今度読み直してみようか。ラジオから突然、キンクスの「ユー　リアリー　ガット　ミー」が流れたらピクッとなるが、ジャズが流れても反射的な応答の一つも無い。まあ、これ以上にジャズとの縁遠さを書き連ねても詮ないのでここらで止めようと思う。

〝次回のアーユボーワンはジャズ特集号か、せきやまさんも近々シンガーデビューするみたいだし。３号はごった煮状態で面白かった、次回も楽しく読ませていただきましょう〟そんなある日、借りた本を返却しに図書館へと足を運んだ。頭の片隅にうっすらとジャズが残っていたのか、ふいに思い出して音楽コーナーに立ち寄る。「ジャズアンバサダーズ」「ブルックリンでジャズを耕す」「ジャズ昭和史」「スタン ゲッツ」「ジャズの証言」・・・「あかんわこれ、訳分らんよ」声には出せない、ここは図書館だから。しかし、下段の棚に眼を落すやキラリと光る背表紙を発見した。『ジャズ耳の鍛え方』腰巻の惹句に「ジャズ耳を鍛えてあなたも体幹を整えよう」とある。これは今思いついた冗談だが光ったのは本当だ。そうか！私はジャズ耳が生まれつき衰えて機能していないのではないか？ざっとページに眼をやればまえがきに「テニスやゴルフの上達法の本は当たり前に見えるのに、ジャズの聴き方の上達法と言われると、首をかしげる方が多いのではないでしょうか・・・ 中略、この本は、年季の入ったジャズファンが知らぬ間に身に着けている、ジャズを楽しむ回路『ジャズ耳』の作り方、鍛え方を通して、ジャズという音楽の楽しさ、奥深さをご紹介すると同時に、ジャズ固有の文化背景と芸術性の問題にも深く切り込んでいきたいと思います」実に頼もしい。通常２週間の貸し出し期間が、コロナの影響で本を一か月以上も借りられるグッドタイミングも後押しして決心した。よし、このテキストを片手にジャズ耳を鍛えてみようか。

私とて秋葉原ＢＣＬクラブ会員の末席を汚す身である。ＣＤやユーチューブなどはオミットしてラジオ番組だけからジャズを聴くことにした。ＪＦＮの「ＡＯＲ ジャズ＆ボーカルナイト」やＮＨＫＦＭの「ジャズ・トゥナイト」は既に聴いたことはある。聴き流していただけだが。今度は学び鍛える為に襟を正して聴く。集中して聴く。酒も断つ。傍らにノートを並べて必要ならメモを取る。心構えは整った。次はジャズ番組の選択だ。番組二つではおぼつかない。調べてみると結構ジャズ番組があるではないか。上記の「ＡＯＲ ジャズ＆ボーカルナイト」「ジャズ・トゥナイト」に加え「ジャズｄｅ行こう」「ＪＡＺＺ Reminiscence」「テイスト・オブ・ジャズ」「山中千尋 いつだってＴ－ＴＩＭＥ」これらは自宅で受信できる局の番組だが少し足りない。日本のジャズ発祥の地は神戸ということで、本場関西からこちらのお二方を特別ゲストとしてお呼びいたしました。ＦＭ ＣＯＣＯＬＯの「World Jazz　Warehouse」ラジオ関西の「ＫＯＢＥ ＪＡＺＺ ＰＨＯＮＩＣ ＲＡＤＩＯ」この二つの番組と聞き逃した番組はラジコで聴く。ラジオ関西は遠距離受信で十二分に聴取出来るのだが、呼んでもいないのに韓国教育第二が集団で押し寄せて来るのでち～ともあきまへんのや。よし、これで揃った。５０歳を過ぎてようやく、壊れた右半球と耳をメンテナンスする機会を迎えるこ

ととなったのだ。 それにしてもラジコのエリアフリーとタイムフリー機能は、２１世紀の大発明の一つに数えても良いのではないでしょうか。

第一章 【ジャズとはどういう音楽なのか】他の音楽ジャンルとジャズを分ける最も大きな要素は「個性」「リズム」「サウンド」「即興」なのだそうだ。それぞれの個性を代表するジャズマンはルイ・アームストロング、カウント・ベイシー、デューク・エリントン、チャーリー・パーカー。これらの個性を三つ乃至は全てを内包するジャズマンがジャッキー・マクリーン、そしてマイルス・デイビス。この六人でジャズが俯瞰できるとある。御三家ならぬ御六家だな。俗にいう音楽の三要素は「メロディー」「リズム」「ハーモニー」だが、ここが大きな差異なのか？また、ジャズは作曲者の音楽ではなく演奏者の音楽であることが大きな特徴ともある。曲の提供者よりもそれを演奏するジャズマンこそが重要なのだ。それでは作曲者が日陰の身で可哀そうとも思うが、それがジャズ。非情だ。

第二章【ジャズを芸術音楽として捉えると何が見えてくるのか】この章は読むのが苦痛だった。つまりジャズは芸術ヨ、と言いたい訳で、それを証明する為にいろんな論を持ち込み、四方八方に話が飛ぶのでややこしくなる。とにかく大衆音楽から芸術へと引き上げた最大の功労者はチャーリー・パーカーらしいが、そうですか、としか言えない。ジャズが複雑な音楽なのは分かったが、そんなに高尚かな？歴史の積み重ねでたくさんの要素を取り入れ、表現の可能性や実験にチャレンジしつつも、徐々に洗練されてきたと言うほうが正しいのではないか？理屈による芸術論を否定するわけでもないが、もっと平易に書かなければ耳を鍛える前に敷居が高過ぎて跨げないです。まあ、芸術論は語りだせば一筋縄ではいかないのが世の習いだが、私はそれが何のジャンルであれ、芸術であると認めるのは極めて個人の問題だと思う。世間の評価や一般的な認識では無い。作品に接して鳥肌が立ったか、言葉が出なかったか、感情の揺さぶりを抑えきれなかったか、つまり理性ではなかなか説明し難い、芸術的興奮を覚えたか否かだけが私にとっての芸術だ。もちろん、そんな経験には滅多に出会えるものではないが。

第三章【「ジャズ耳とは」】「ジャズ耳」とは要するに「ジャズファン特有の感覚」のことです。これこれ、これを私は鍛えたいのよ。二章はすっ飛ばしても良かったな。『ジャズファンの間では「あいつはいい耳をしている」「耳が悪い」などということが盛んに囁かれ、センスのない人間に対しては「タコ耳」などという蔑称が進呈されます。・・・中略、まあ、こうした独善的とも思えるファンの生態がジャズの敷居を高くしているという反省はあるのですが、ファンが自らを特権化する、あるいはしたがるには、それ相応の理由があるのです。』そんなの知らんよ！その伝でいえばジャズ耳が機能しない私など、さしづめ「人間止め

ますか？」だな。まあ、それはいい。許し難いのは聡明で愛らしいタコを馬鹿にしたことだ。この後、またジャズは特別だと言いたいが故にちまちまと書き連ねる。本場アメリカのジャズファンもそんな思いを抱いていちいち聴いているのかい？ジャズ特有の「個性」「リズム」「サウンド」「即興」について解説されているが、さっと目を通してこの章もすっ飛ばす。

もちろん、本を読んでイライラしているだけではありません。並行してラジオの聴取にもちゃんと励んでいます。

ＮＨＫＦＭ「ジャズ・トゥナイト」皆様のＮＨＫ，堅実な番組作りに定評あるＮＨＫ、もっとも期待する番組だ。しかし、時間帯と曜日の関係でラジオによる聴取が難しい。こんな時こそ、らじるらじるの聞き逃し配信。あれっ、無い。青春アドベンチャーはあるのにトゥナイトは無い。ずいぶんと探したが無い。どうしようも無い。

「ＡＯＲジャズ＆ボーカルナイト」パーソナリティーのユキ・ラインハートさんが、よく言い間違えたり噛んだりするので「take it easy ネ、ユキ！」と声援を送りたくなる番組ですが、夕飯を済ませて部屋でプラモる時によく聴きます。火曜日の放送がジャズ。落ち着いて聞くことが出来るので好きな番組です。

「ジャズ de 行こう！」ジャズスタンダードナンバーを中心にビッグバンド、ディキシーランド、スウィングをお届けします。とある。番組のオープニングがいいぞ。しっかりとした解説は簡潔に、曲は最後まで流すスタイルに共感。ジャズが最もジャズらしかった時代の演奏が中心。だのに、別れはいつだって突然やって来る。３月２５日放送の最後にさらりと今回で放送終了のアナウンスが。まだ君のことをよく知らないのに・・・・。

「ＪＡＺＺ Reminiscence」レミニセンスって何？スペルが難しくて打ち込んでも打ち込んでも間違える。日本人には易しくない単語だ。トランプさんもきっと間違えるぞ。意味は回想。ならば「ジャズの回想」でいいじゃん。でも番組はとってもグーよ。

ラジオＮＩＫＫＥＩ「テイスト・ オブ ・ジャズ」５５年超の歴史を有する、民放ラジオ最長寿級のジャズ番組なのだそうだ。短波受信が楽しみではあるが大概悪い。ＳＩＮＰＯ２４２３２。常夏の島グァムよりお届けするショートウエーブに完負け。日経さんの奮起を促したいところだが、もうこれ以上に奮起は出来ないだろうなあ。一度だけ良い受信状況に当たったが、何故かトークが聴き取り辛い。不思議だったがラジコで聴いて理由が判った。トークの最中にバックで曲

が掛かる時、その音が大きいので話し声とかぶり競争して潰し合うのだ。女性アナウンサーの声と比べれば、年配の男の声は総じて低いのも一因だ。しかし、やはり老舗の貫禄、この番組を聴くとジャズは大人の音楽だと思い知る。解説もマニアックでとても手応えを覚える。ウッドベースがベベンベンベンブンと唸りを上げれば、そりゃあ、女性もとろけちゃうわなあ～、うふふ。俺なんか今だにゾンビーズだもんね。

ＦＭとやま「山中千尋 いつだってＴ－ＴＩＭＥ」とってもグーな「ＪＡＺＺ Ｒem・・・・・・」も山中さんの番組。日本と米国で活躍する女性ジャズピアニストだ。１５分の短い番組だが、月曜から金曜まで山中さんの思うがままの独白を聴いていると、いつしか親近感が湧いて〝千尋ちゃん〟と呼んでしまう自分に気付く。いかん、いかん。夕方の時間帯に合わせてなのか明るい曲が多い。粘り気のある真夜中ジャズは聴かなかった。御本人の演奏をよく流したが繊細かつパワフル。楽器の中でピアノはあまり好きでは無いのだが、千尋ちゃんのピアノは別さ。番組の最後にお便り募集の告知がある。「音楽のこと、ニューヨークのこと、恋愛相談、人生相談、なんでもＯＫ」お手紙出そうっと。『拝啓 千尋ちゃん。いつだったか梶井基次郎が好きだって言ってたじゃない。おじさんも基次郎は読んだよ。桜の樹の下には檸檬が埋まってるんだよね。怖いよね。でも、才能があって、とっても頑張り屋さんの千尋ちゃんが、基次郎を好きなんてすっごく意外だったな。そのギャップにおじさん、キュンキュンしちゃう。７月の富山オーバードホールでの公演、無事に開催されるといいね。おじさんも神様にお願いしてるからきっと大丈夫。いつかおじさんの街にも仲間を引き連れて遊びに来てくださいな。絶対行くから。約束だからね（＞◡＜）✧♡ 敬具 』

ＦＭ ＣＯＣＯＬＯ「World Ｊazz Warehouse」ワレホウセって何？意味は倉庫、貯蔵所だって。ならば「世界のジャズ倉庫または貯蔵所」でいいじゃん。でも番組はとってもグーよ。ＦＭ ＣＯＣＯＬＯのキャッチコピーは「日本初、ＯＶＥＲ４５のためのＭＵＳＩＣ ＳＴＡＴＩＯＮ」イエーイ！コロナ自粛を念頭に置いて、パーソナリティーから渋い声で一言「まあ、ジャズライブの無い人生、つまらないね。刺激が無いですね。刺激と言えばラジオじゃないですか。ラジオ聴きましょうね」レイディオウ、イエーイ！この番組は多岐に渡って最新のジャズを取り上げてくれる。私が聴いただけでも昭和歌謡をジャズにするシンガーやジャズをハーモニカで奏でるアーティストをゲストに招いたり、新進気鋭のタイ人トランペッターの新譜を紹介した。倉庫と貯蔵所の看板に偽りなし。

ラジオ関西「ＫＯＢＥ ＪＡＺＺ ＰＨＯＮＩＣ ＲＡＤＩＯ」海の上の放送局、ラジオ関西の神戸ハーバーランドスタジオからお届けする、二時間半のロングラ

ンジャズ番組。民放ラジオ局の昼番組からお天気、交通情報、ニュース、中継、ラジオショッピングなどを取り除いたようなスタイル。番組中にＣＭはいっさい挟まれない。もちろん、リクエスト含めて流す曲は全てジャズ。語る蘊蓄も広く奥深い。パーソナリティーの本職はジャズミュージシャンである筈だが、べしゃりが驚くほど手馴れていて上手い。関西人恐るべし。ジャズの街神戸を広く発信する為の番組だから神戸情報が豊富。いろんなゲストを呼んだり、お便りを紹介したり、ジャズに特化したコーナー有りでとにかく賑やか。神戸ソースの話題が延々続いたりもする。「みんな友達やねん、友達がジャズやってんねん、ご紹介しましょか」こんなノリ。ラジオ関西所蔵の膨大なジャズＬＰの中から選んだレコードの片面全てを、ノンストップで再生して聴かせるラスト三十分のコーナーは必聴です。これには参りました。今年は残念ながら中止だそうだが、神戸ジャズデイ、神戸ジャズウオーク、神戸ジャズストリートなどのお祭りが盛んな事を知った。ＪＢＬのスピーカーやマランツのアンプなど、高級オーディオ製品が一番売れるのは神戸ではないのか？一度も訪れた事の無いジャズ天国。牛は旨いし、ネ～チャンは綺麗だし、オラは死んじまうかも知れません。また、西日本有数の米どころと聞いていますので、ジャズを聴きながらソースたっぷりのビフテキ定食（ごはん大盛）を味わいたいものです。〝実るほど 神戸で垂れる 稲穂かな〟

第四章【ジャズの楽しみかた】『さていよいよ「ジャズ耳」実践編です。言ってみれば、効率的にジャズを楽しめる身体を作り上げるための実用カリキュラムです。・・・中略、精神論は一切ありません。あるのはただただ実践的「ジャズ耳強化」テクニックです。』来たな、実践！まず、誰もが知っている定番スタンダードソングをそれぞれのジャズミュージシャンやシンガーが、どうアレンジするかを聴き比べるのだ。一例として「マイ ファニー バレンタイン」が俎上に載る。フランク・シナトラの歌をベースにカーメン・マクレエ、マイルス・デイビス、ビル・エバンスとジム・ホールのデュオを聴き比べろ。ジャズにとって原曲は素材に過ぎぬことを覚えるべし。次はジャズスタンダードナンバーの聴き比べだ。これもたくさんのミュージシャンが例として挙げられている。面白そうだがどうする？あるでしょ、ユーチューブがあるでしょ！チェックすれば、本にリストされているほぼ全てがアップされている。節約だ。ちょっと後ろめたいが身銭を切らずに済むのはありがたい。続いてブラインドゲームに挑戦。演奏だけ聴いて「このアルトは誰？テナーは誰？」と問うクイズだそうです。はいはい、クイズドレミファドンですね。違うか、違うな。 お次は派閥を聴き分けろ。ジャズにはパーカー派、パウエル派などジャズマン系譜がある。ジャズの演奏スタイルを系統的に把握するには欠かせない聴取技術である。その為には、聴いた印象を言葉にしろ、ノートに書け、メモを取れ、そしてミュージシャン別にきっちりと整

理すること。まだまだ終わらない。ジャズの聴き所を把握するために理解すべきキーワードの解説だ。「テーマとアドリブ」「スイング感」「グルーヴ感」「ライブＶＳアルバム」全て頭に叩き込め。ジャズは音色に痺れろ！お前が使っている２０年前のＣＤ/ＭＤラジカセではちっとも痺れんな。良いオーディオ装置を買え。特別に効率的アルバムコレクション法も伝授いたすぞ。最後に入門者向けアルバム三十枚の紹介。名盤揃いだから漏らさず全部買え。以上でこの章終わり。やさしく手ほどきしてくれると思っていたら、こんなに辛いスパルタ教育を受けさせられるとは夢にも思いませんでした。

第五章【〝搦め手〟からジャズの面白さに近付く】ジャズをより楽しむために知っておいて損の無い知識を教えてくれる。「ジャズレーベルとプロデューサー」「黒さ、白さについて」「Ｂ級ということ」「海賊版」「オーディオについて」「ＣＤかアナログか」など。この章は面白く読ませていただきました。読了。内容を１００％理解したとはとても言えませんが、ジャズを知らない私もジャズの入り口には辿り着いたかな？と感じています。著者の後藤様、どうもありがとうございました。

本も読んだ。ラジオでジャズもたっぷりと聴いた。締め切りに間に合うように文章も書いた。終わった終わった。酒飲んで寝るか。いや、もう少しだけ。

果たしてジャズ耳は鍛えられたのであろうか？筋肉痛で内耳が少しピクピクするから効果はあったと信じている。ラジオ聴取の際に取ったメモを読み直してみた。「ローソンもちもちチョコレート、インパルスレーベル、ポニョ、エッジの効いたジャズ批評だ、矢野顕子、断念、シネマノワール、これもジャズなの？ミンガス・・・・」字もミミズなので書いた私が訳分らん。情け無いが仕方が無いな。およそ一か月に渡って古き良き時代のジャズから最新のジャズまで、いろいろなミュージシャンの演奏を番組から聴かせてもらった。取りとめの無い聴き方なので、個別のミュージシャンとその演奏についてはすっかりと霞んでしまったが、しかし、己の好みは把握した。時代は５０ｓから７０ｓにかけてのミュージシャンとその演奏。好きな楽器は管楽器だ。その中から一人を選んでＣＤを買って聴いてみようかと思う。どの番組で語られたのか忘れたが「マイルスを聴けば事足りる、と言われるぐらい大きな存在」熱心なジャズファンはおやおや、と否定するやも知れぬが何となく理解できる。７０年代後半にスマッシュヒットを放ったディーボはこう言った。「ロックを知りたきゃ、ビートルズとストーンズだけを聴けば事足りる」私もディーボの意見に賛同出来るからだ。マイルス・デイビスは１９７０年ワイト島ロックフェスティバルで、フーやドアーズと同じステージに立って演奏したという仲間意識も若干ある。動画を観たがエレクトリック

マイルスは実にクールだった。帝王マイルスから入って間違いはそう無かろう。風体も気に入った。もしもジャズに夢中になれたらマイルスから拡げていけば良いのだ。マイルスの師匠であるチャーリー・パーカー、同時代のソニー・ロリンズ、ジョン・コルトレーン、喧嘩したとかいうセロニアス・モンクなどへ。もう、ラジオからジャズが流れても無関心はない。これからは慌てずゆっくりとジャズに接していこうかと思う。そう、急ぐ必要は一つも無いのだ。ここでふと、気になった。我が街にジャズはあるのか？上越を中心に活動するジャズバンドがある。ジャズバーがある。ジャズ喫茶もあるではないか。ジャズ喫茶「プー横丁」新宿ゴールデン街にあるような店名がビパップだぜ。今度ランチにでも行ってみようか。店主に「ジャズ、お好きなんですか？」と問われても、何と答えてよいやら返事に困るのだが、本格的なコーヒーにケチャップたっぷりのオムライスがメニューにあったら最高だな。

世界中に星の数ほどプラモはありますが、ジャジーなパッケージのプラモはこの世にこれしか無いと思います。（初版では無く再販パッケージ）ソノシート付きです（聴いたことはありません。何が録音されているのか？）

１/８スケール。　ヤマハのロゴは自作です。ブラシもちゃんと付いています。

１/６スケール。部品図を見てもわかる通りに細かいのですが、出来上がりは驚くほどの精密さです。

日本模型（ニチモ）のミュージックシリーズは１９６８年に発売されたドラムスからシリーズが展開されました。エレキギター、ベースギター、フォークギター、クラシックギター、ハワイアンバンド、バンジョー、スーザフォン、ユーフォニウムなどがあり、ジャズによく使われる楽器としては他に、トランペット、トロンボーン、ピアノ、ウッドベースがあります。とにかく、このシリーズは５０年以上前のプラモデルとは考えられないぐらい出来が良く、全てを集めて作り倒したいとの願望はありますが、今では当然にプレミア価格で売買されています。悲しいことに、私はゾゾタウンの前社長ではありませんからとっくの昔に諦めています。その中でもドラムスとテナーサックスはずいぶんと人気があったのでしょう、再販、再再販が繰り返されたので、比較的に手の出やすい値段で今でも買えるようです。
まあ、私はこんなキットをちまちまと組み立て、シュッ、シュッ、と塗料を吹きながらラジオを聴いているのです。

スリランカのお正月はいつ？

アエーシャー・ダルマシリ

スリランカのお正月は「太陰暦」を参考にして、「ベテランの占い星師」たちによって新年を迎える、日付、日時を決める。そうやって決められた 2020 年の正月時刻は 4 月 13 日 20 時 30 分だった。毎年 4 月はお正月の月だ。12 日、13 日、14 日のいずれかのうちお正月を迎える。「4 月なのにお正月」と疑問に思われる方が多くいるに違いないだろう。「お正月はそろそろだよ」と全国に知らせる面白い小鳥がいる。カラスの姿に近いで、「コハー」と呼ぶ。この鳥の鳴き声は 3 月、4 月中よく聴こえる。収穫とれる時期だし、色々な花を咲く時期で、スリランカのお正月は自動的に自然と繋がっている。特に、スリランカの正月は仏教、ヒンドゥー教、占星術先住民の文化などが融合したスリランカ独特の文化となっている。

スリランカのお正月の特徴は儀式はいくつかあるこである。そして、それぞれの儀式ごとに爆竹を鳴らす。儀式をざっくり説明すると以下の通りである。①　不吉な時間（シンハラ語でプンニャカーラヤ）を迎える　②　新年を迎える　③　かまどに火をつけて料理を炊く始める儀式　③　何か自分がやっている仕事に関することをやる儀式（5 分~10 分ぐらい）④　お金を交換する儀式　⑤　炊いたご飯あるいはミルクライスをご馳走する儀式　である。翌日は頭にオイルを塗る儀式　と　仕事に出発する儀式がある。また、お正月大会も行う。

今回はコロナで外出禁止のため、必要な材料が手に入らなかったし、お正月大会を行うことができなかったし、親戚の家を訪問することができなかった。しかし、お正月のタイムスケジュールに合わせて、儀式をやったり、料理やお菓子を作ったり、少しでも楽しくみんな家の中で過ごしたと思う。

もしみなさんは 4 月中にスリランカへおいでになったら、きっとスリランカのお正月実際に体験できると思う。そして、そのようにスリランカに旅されている方は宿泊のホテルなどで新年のセレモニーや伝統菓子など新年の料理をご馳走できるはず。逆に、4 月 13 日、14 日はほとんどのお店は閉店だ。（イスラム人営業除く）交通機関も少なくなる。ご旅行中の方はご承知ください。（場所によっては 4 月 11 日から 15 日まで長期休

業とする場所もございます。）ご旅行中で、行きたい店や場所がある方事前に営業しているかどうか確認されることをお勧めする。

以下の写真はスリランカのお正月の食卓の様子である。

スリランカのラジオの話　アエーシャー・ダルマシリ

スリランカでは植民地支配局がラジオ放送を1928年と言う早い時期に導入した。それは革命的な変化を起こした。今は 70 ほどのラジオ局、さらに 様々な海外局が存在している。時代の流れと共に放送は急速な進歩を遂げている。昔 テレビもなかった時代、ラジオは大きな役割を果たしていたそうである。

スリランカはFM及び短波で放送している。その他に小規模ではあるが、全国で約 15 ～ 20の商業放送事業者がサービスを提供している。Siyatha FM, Shaa FM, Neth FM, Hiru FM, Sirasa FM はスリランカの有名な放送局である。スリランカのラジオチャンネルでは上座部仏教の教え、ニュース、古代から近代の歌、ユーモア番組など色々放送されている。他の国と違ってスリランカのラジオの特徴として、朝1時間ぐらい、午後1時間ぐらい 必ずお経を流すことを挙げられる。仏教の教えだけ放送するラジオ局もある。そして、スリランカは多民族国家で公用語はシンハラ語だけど、シンハラ語だけではなく英語、タミル語の放送局もある。

さらに、それぞれの放送局を人気にさせるために「ライブ ゲーミング」を行い、優勝する方にお金や、プレゼント渡したりしている。最近盛んになっているやり方は「私は～ FM 聞きますよ」と書いて自分の家の前に貼って置いたら、その放送局の担当者が来てお金をプレゼントするやり方である。技術をどれぐらい発達してあっても、ラジオを聞く方の減少は見られないぐらいである。

日本の皆様は不思議に思いに違いないですが、スリランカの公用交通の1つになるバスの中はラジオを流れてあるのは普通である。私はスリランカ人なのに、スリランカのラジオスタジオには行ったことないが、日本に留学していた時、「武蔵野FM」にゲストとして参加した経験がある。それは人生の中の初めてのライブのプログラムだった。

将来、スリランカの日本語学習者のリスニング力を上達するために、スリランカで日本語放送局をはじめたいと考えている。皆様の御協力をいただければと思う。

以下の写真は武蔵野FMに参加した思い出である。

「関ヶ原の南、藤原岳の麓に響く Jazz」

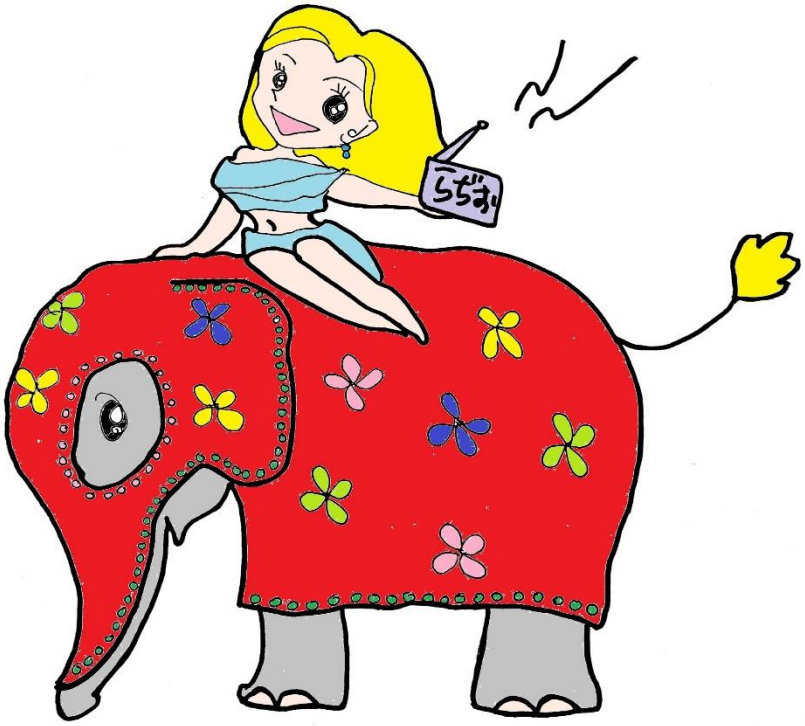
石崎亮史朗（いしざき きょうしろう）

三重県いなべ市のエフエムいなべで毎週土曜日の 16 時（日本標準時）から放送している、「香井啓志の JazzBox」を聴いています。インターネットを経由する放送も行っていますので、お薦めします。エフエムいなべの公式 facebook（’いなべ FM-FM INABE 86.1MHz’で検索して下さい）に曲名等詳細が掲載されています。

INABE FM 86.1MHz

ここから先は、「ABC 50’s」の私の投稿の補足になります。音楽を聴くのが好きなので、土曜日の午前に NHK-FM で放送されている 、「ウィークエンドサンシャイン」と「世界の快適音楽セレクション」を聴いています。Jazz ではありませんけど、三重県四日市市のエフエムよっかいちで放送されている、「ブエノスディアス タンゴでおはよう」も聴いています。

CTY FM 76.8 MHz



魂（ソウル）のゆくえ

MAEMORITA

「あーゆぼーわん」の読者で BCL をきっかけにしてラジオから流れるいろいろな音楽番組に耳を傾けているうちに特定のジャンルの音楽ファンになった方は多いことでしょう。

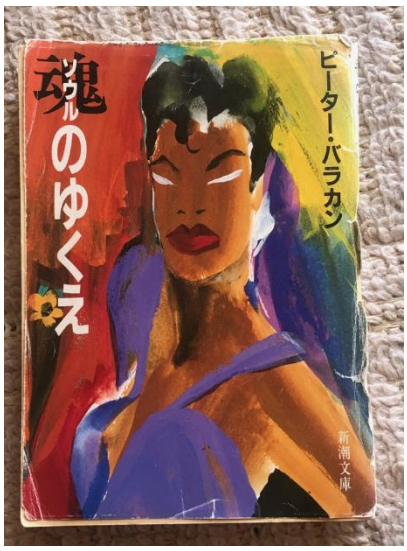
例えば VOA の JAZZ 番組を聴いて JAZZ ファンになった方，韓国 KBS の歌謡トップ 10 を聴いて韓国歌謡ファンになった方，南米局の DX をしていてラテン音楽ファンになった方など相当数いらっしゃると思います。

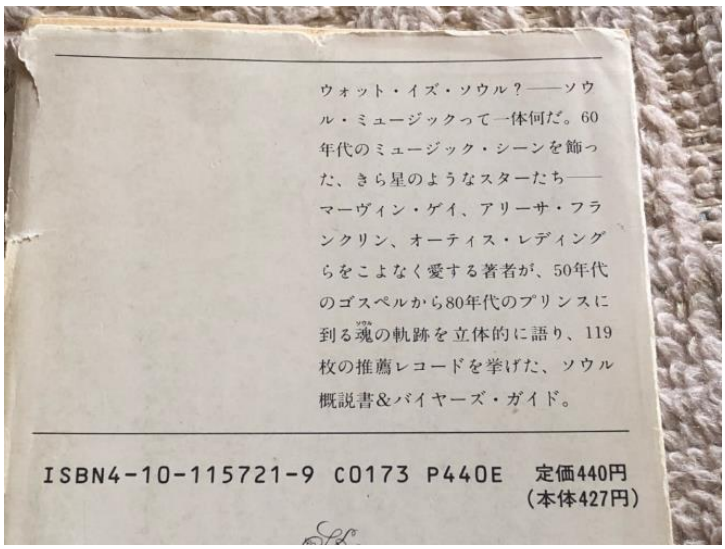
私もこれまでラジオを通じて様々な音楽に出会ってきましたが，その中で特に好きになった音楽ジャンルの一つに「ソウル・ミュージック」（以下「ソウル」）と呼ばれる古いブラック・ミュージックがあります。

今回は私がどのようにラジオを通じてソウルと出会ったのか，そしてソウルをどのように楽しんできたかについてお話ししてみようと思います。

まず私の手元にあるボロボロになった一冊の文庫本を紹介します。

ブロードキャスターのピーター・バラカンさんが著した「魂（ソウル）のゆくえ」という古い本です。この本は私にとって教科書のように何度も読み返した思い出の一冊です。1990 年に大学生になったばかりの頃，前年に出版されたこの本と出会いました。そのおかげで，既に好きになっていたソウルをより広く，そしてより深く楽しめるようになりました。





ウォット・イズ・ソウル？——ソウル・ミュージックって一体何だ。60年代のミュージック・シーンを飾った、きら星のようなスターたち——マーヴィン・ゲイ、アリーサ・フランクリン、オーティス・レディングらをこよなく愛する著者が、50年代のゴスペルから80年代のプリンスに到る魂の軌跡を立体的に語り、119枚の推薦レコードを挙げた、ソウル概説書&バイヤーズ・ガイド。

ISBN4-10-115721-9 C0173 P440E 定価440円（本体427円）

「魂（ソウル）のゆくえ」（1989 年 新潮社）

この本は初版が刊行されて 19 年目の 2008 年に別の出版社から改訂版が発行され，さらに初版から 30 年になる昨年にも改訂新版が発行されるという大変なロング

セラーです。
この本のことはまた後で触れることにしましょう。

私がソウルに関心を持つきっかけの出来事は中学時代にまで遡ります。
中学校に入学したのは 1983 年のことでした。英語の授業が始まったことから，英語の歌（つまり「洋楽」と呼ばれている音楽）を聴いてみたくなり，当時の BCL なら誰でも知っていた KYOI というサイパンの放送局にダイヤルを合わせるようになりました。というのは，KYOI は昼夜を問わず洋楽を流していていつでも最新のヒット曲を聴くことができたからです。この放送局はほんの数ヶ月前の 1982 年 12 月に開局したばかりでした。アメリカ西海岸のロサンゼルスのスタジオで制作された番組のテープがサイパンに空輸され，サイパンの送信所から日本に向けて短波で最新の洋楽ヒット曲を 24 時間ノンストップで流し続けるというこれまでないタイプの放送を行なっていました。曲と曲との間に入るアメリカン・スタイルの英語のアナウンス *"This is Super Rock KYOI, K-Y-O-I, Saipan"* や *"Rock'n'roll music from Los Angeles, USA"*，そして頻繁に出る *Super Rock KYOI !* というジングルはかなりインパクトがあり，今でも耳に残っています。その頃はマイケル・ジャクソン，ライオネル・リッチー，ビリー・ジョエル，ジャーニー，TOTO，スティクス，ポリス，メン・アット・ワーク，デヴィッド・ボウイ，デュラン・デュラン，カルチャー・クラブなどの曲がヘビーローテーションで流れていました。

この受信機（TRIO R-600）で KYOI を聴いていました。
表示されている周波数は当時の KYOI の周波数です。

中学生の私は KYOI を聴き続けることで洋楽ファンになり，もっと幅広く洋楽を聴くためにラジオ・オーストラリアやロンドン BBC の音楽番組，そして日本国内の民放中波局で放送されるベストテン番組やリクエスト番組をラジオ関係の雑誌に掲載されている番組表を調べ，次々とダイヤルを合わせるようになりましたが，次第に洋楽はフェージングや雑音が発生する短波や中波ではなく，音のいい FM 放送で聴きたくなってきました。それからは目当ての曲が流れる日時を事前に把握するために二週間おきに発行される FM 雑誌（今の若い人たちには信じられないと思いますが，昔はこういう雑誌が複数存在していたのです）を定期購読して，NHK-FM の番組表をチェックするようになりました（まだ私の住む地方には民放 FM 局はありませんでした）。

その当時の NHK-FM には洋楽がかかる音楽番組として，「朝のポップス」，「軽音楽をあなたに」，「サウンド・オブ・ポップス」，「サウンド・ストリート」，「クロスオーバー・イレブン」，「リクエスト・コーナー」等があり，目当ての曲がかかる時間にはラジカセの前で全神経を集中して絶妙のタイミングで録音ボタンを押してエアチェック（今では死語になりましたが，ラジオを録音する行為のことをこう呼んでいました）をしたものです。これらの番組以外にも地元の NHK 局で制作される毎日 18 時からの「夕べのひととき」や土曜日午後 3 時からの「FM リクエスト・アワー」なども気になっている曲が流れる可能性があったため，常にラジカセにカセットテープを入れていつでも録音できる状態にして聴いていました。多くの皆さんも私と共通の経験をされていることでしょう。

当時購入していた FM 雑誌「週刊 FM」（音楽之友社）　どちらも 1984 年に発行されたものです。

ラジオを聴かない時はエアチェックしたカセットテープを聴いていましたが，録りためた曲を聴いていくうちに似た傾向のある曲が多いことに気付きました。具体的にはビリー・ジョエルの「あの娘にアタック」，カルチャー・クラブの「ポイズン・マインド」，ホール＆オーツの「マンイーター」，フィル・コリンズの「恋はあせらず」などです。どれもリズムやベースラインが共通していて，偶然の一致にしては似過ぎていると思っていましたが，やがてラジオ番組の解説や FM 雑誌の記事から，それらはアメリカのデトロイトにあったモータウンというレコード会社が 1960 年代に発表していた曲の特徴あるリズムパターンを使ったものであること，そしてそれは一般的にモータウン・サウンドと呼ばれ，「ソウル」という音楽ジャンルに含まれていることを知りました。また「恋はあせらず」はモータウンに所属していたダイアナ・ロス&シュープリームスの 1966 年の曲であることも知りました。最新ヒット曲が古い曲のパターンを取り入れて作られていることや自分が生まれるよりずっと昔の曲がカバーバージョンで現代に甦っていることは中学生にとって大きな驚きで，それからソウルに興味を持ち始めました。

左　ビリー・ジョエル「イノセント・マン」　右　カルチャー・クラブ「カラー・バイ・ナンバーズ」
どちらも 1983 年の大ヒットアルバムで，ソウルのエッセンスがたっぷりです。

FM 雑誌には様々なアーティストのインタビュー記事が掲載されていました。アメリカのヒューイ・ルイス，ビリー・ジョエル，ブルース・スプリングスティーン，ホール&オーツ，イギリスのカルチャー・クラブ，ワム，スタイル・カウンシル，ポール・ヤングなどの人気アーティスト，そして大御所のローリング・ストーンズまでみな口を揃えて 1960 年代のソウルが大好きだとか大きな影響を受けたと発言しており，ほとんどの人気アー

ティストがルーツにしている昔のソウルはいったいどんな音楽なのだろうかと思いながら中学生の私は FM 雑誌の記事を読み，番組表をチェックしてはソウルの名曲が放送される日を待つようになりました。当時は現在のように何かの曲が気になったらすぐに YouTube で試聴できる時代ではなく，放送で流れるのを待つしかありません。中学生にとってお小遣いを出して 2500 円や 2800 円もする LP レコードを買うことは半年に一度できるかどうかの贅沢だったため，未知の曲を聴くためにレコードを買ってみるという選択肢はまずあり得ませんでした。

1986 年に高校に入学してからは，音楽評論家の渋谷陽一さんや萩原健太さんのラジオ番組の影響で最新ヒット曲よりも 1960-1970 年代のロックやポップスを好んで聴くようになり，ソウルのスタンダードとされる曲も少しずつ知るようになりました。

ちなみにこの頃，KYOI にダイヤルを合わせると，放送を続けていくためには皆様からのご寄付が必要です，というような寄付を呼びかける日本語と英語のアナウンスが曲と曲との間に頻繁に流れるようになっていてうんざりしたものです。そもそも音の悪い短波で洋楽を聴くという感覚が日本人には合わなかったのでしょう。開局した頃は物珍しさから多くのリスナーを集めましたが，電波状態が不安定な中で洋楽を流し続けるだけの番組編成だったため，数年で飽きられてしまい，リスナーが去り，スポンサーも撤退したのか間もなく閉局してしまいました。

この年に NHK-FM でピーター・バラカンさんの構成と DJ により，五夜連続で「ジャイアンツ・オブ・ソウル」という特集番組が放送されました。ソウルに興味を持っていた私は連日この番組を集中的に聴いたことで，この音楽の魅力に一気に取りつかれました。日ごとに設定されたテーマに従って選曲された多くの名曲を聴きながら，ソウルは教会音楽のゴスペルがルーツであること，1940 年代に強烈なビートと激しいヴォーカルのリズム&ブルースが生まれたこと，1950 年代からレイ・チャールズ，サム・クック，ジェイムズ・ブラウンという巨人たちがリズム&ブルースにゴスペルの要素を持ち込んで 1960 年代ソウルの基礎を作り上げたこと，1960 年代にはポップ色が強い都会風のソウルを作っていたモータウンと南部でゴスペル色が強いソウルを作っていたスタックスという二つのレコード会社がヒットチャート上で競い合っていたこと，1970 年代にはファンクや洗練されたフィラデルフィア・ソウルが人気を博したことなどをソウルに造詣の深いピーター・バラカンさんの解説で知り，すっかりソウル・ファンになってしまいました。

その 2 年後の 1988 年には再びピーター・バラカンさんの構成と DJ により，続編の「ホワット・イズ・ソウル？」という質の高い特集番組が五夜連続で放送され，こちらも夢中になって聴きました。

私のソウルへの傾倒はこの二つの番組から決定的になりました。当時周りで流行っていたハードロック，ユーロビート，ニューミュージックやアイドルポップス等よりも古いソウルの方がずっと私の好みに合うように感じました。

1990 年から大学進学のため京都に住むことになりました。地元では見たことのなかった中古レコード店が多く，アルバイトで多少自由になるお金ができたことから，安く

中古のレコードや CD を手に入れることができる環境になりました。

　そんな中で最初にご紹介した「魂（ソウル）のゆくえ」と出会いました。たまたま入った書店の文庫本コーナーで目につき，手に取ったところ，高校生の時に感銘を受けた二つの特集番組の内容を基にしてピーター・バラカンさんが書き下ろした本であることがわかり，早速買って読み始めました。もともと番組を通じてある程度ソウルに関する予備知識は持っていたため，行間から溢れ出るピーター・バラカンさんのソウルへの愛情を感じながらすんなりと読み進めていくことができました。

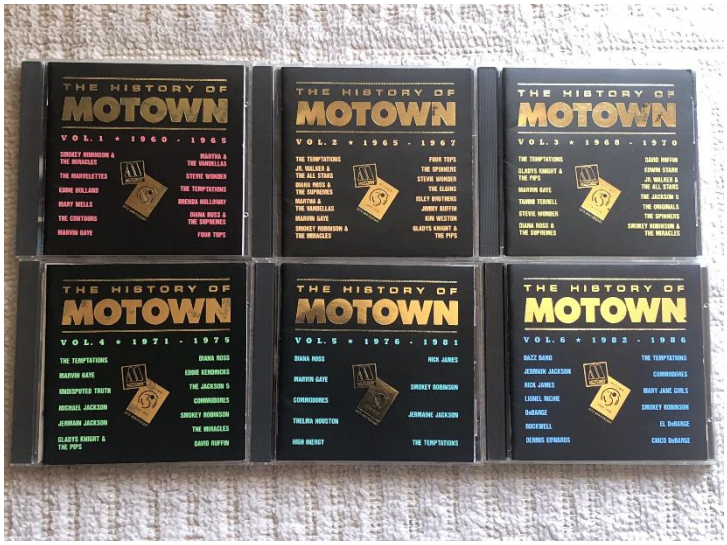
　その後，私はこの本をガイドブックにしながら，紹介されている曲やアーティストについてベスト盤やオムニバス盤を少しずつ手に入れて聴いていくようになりました。アーティストの生い立ち，曲が生まれた背景，アーティストとレコード会社やプロデューサーとの関係などの逸話を読みながらこれまで聴いたことのなかった曲を新たに開拓していくことは本当に楽しく，それ以来今に至るまでずっと古いソウルを聴き続けています。
　本を読みながら音楽を聴くという楽しみ方を教えてくれたこの本のことを忘れることはないでしょう。私にとって永遠の「名著」です。

【付　録】
　ここからは　この本をガイドブックにしながら私が集めてきた CD をいくつか紹介してみます。
　まず 1950 年代にソウルをメジャーにしたサム・クック，レイ・チャールズ，ジェイムズ・ブラウンのベスト盤です。

左上　Sam Cooke/The Man and His Music
右上　Ray Charles/The Definitive Ray Charles
下　　James Brown/40th Anniversary Collection

ソウルは，レーベルごとに歴史をたどるオムニバス盤で様々な所属アーティストの作品を聴いていくのも面白いものです。時代の流れによってアーティストの歌い方やサウンドが変わってくることに気付いたりして新たな発見もあります。
これまでに私がレーベルごとに購入したオムニバス盤を紹介していきます。

○ ヒストリー・オブ・モータウン　1960～1986

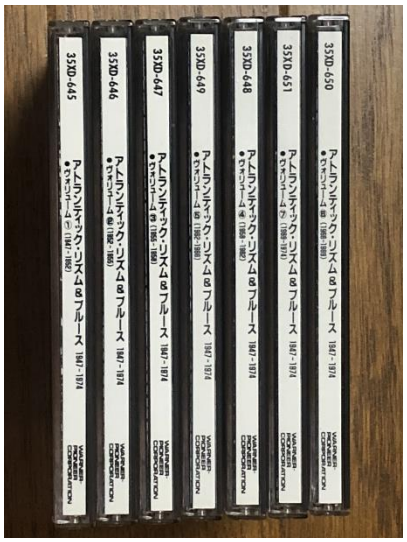


モータウンの歴史がわかります。マーヴィン・ゲイ，スモーキー・ロビンソン，スティーヴィー・ワンダー，ダイアナ・ロス＆シュープリームス，テンプテーションズ，フォー・トップス，ジャクソン5などのスターの代表曲が勢ぞろいで，どこかで聴いたことのある曲がたくさん収録されています。

○ スタックス/ヴォルト・ザ・コンプリート・シングルズ　1959～1968

モータウンとヒットチャートで競い合っていたスタックスのオムニバス盤です。
オーティス・レディング，サム＆デイヴ，ルーファス・トーマス，ブッカーT＆MG’sなど渋いアーティストが揃っています。

○アトランティック・リズム＆ブルース　1948～1974



　アトランティック・レコードは後にレッド・ツェッペリンやイエスなど白人のロックも手掛けるようになりましたが，もともとブラック・ミュージック専門のレーベルです。このオムニバス盤はレイ・チャールズ，アレサ・フランクリン，ウィルソン・ピケット，ドリフターズ，コースターズなどの名曲が満載です。

最後に，私の愛聴盤である日本人によるソウルの作品を紹介しておきます。

左上　上田正樹＆サウス・トゥ・サウス/この熱い魂を伝えたいんや
　　※1970 年代に上田正樹が結成していたソウルバンドの 1975 年のライブ盤
右上　RC サクセション/シングル・マン　※忌野清志郎の歌声が素晴らしい 1976 年の作品
左下　和田アキ子/ダイナマイト・ソウル・ワダ・アキコ　※1970 年代のソウル系の曲を集めたもの
右下　サザエさん音楽大全　※毎週日曜日の夜 6 時半から放送されている人気アニメのサントラ盤で，オープニング曲はまさにモータウン・サウンドです

音楽はいろいろと聴いていくと面白いものをたくさん見つけることができます。
ぜひ読者の皆さんも幅広く音楽に親しんでみてください。

以　上

哀愁の秋葉原に電磁波が降るのだ

ミーティングの話をしよう。

おれが初めて BCL のミーティングに参加したのは二十歳を少し過ぎた頃だ。東京のミーティングだった。おれは当時、千葉に住んでいた。過去のある時期まで地元千葉でもミーティングが開催されていたのは知っていた。だが、恐くて行けなかった。人見知りと言うこともあったが、BCL のレベルが低かったので恥ずかしかったのだ。
当時のおれはたまに日本語放送を聞く程度のごくありふれた普通の BCL であった。そういう場に参加できる人たちはきっと珍局をバリバリ受信されているスーパー BCL に違いない。知識も経験も豊富で「短波」誌にもレポートされているような人たち。そんなふうに思っていた。自分とは無縁の世界だ。
そんなおれがなぜ東京のミーティングに参加しようと思ったのか。じつはそのミーティングはある BCL クラブが主催するもので、おれもそのクラブのメンバーになっていたのだ。ある日、クラブの代表者から「大事な話があるのでミーティングに来てくれ」という連絡があった。それまで前述の理由で積極的に参加する気は生まれなかったのだが、「大事な話」と言われれば断るわけにもいかないだろう。半ば強制的な雰囲気で参加した。

初めてのミーティングは参加者 10 名程度だっただろうか。もちろん彼らの顔を見るのは初めてだ。クラブの会報上で名前だけは知っていたが、想像していたイメージと合う人、まるで違った人などいろいろあって面白かった。
まずは恐れていた自己紹介。先輩参加者たちは近況を交えてさらりと話されていたが、おれの心臓はどきどき鳴っていた。順番が回って来た。「はじめまして」の挨拶に続いて千葉から来たこと、ラジオは何を使っていてどんな放送を聞いているかなど、簡単に紹介した。
特にリアクションもなく順番は先に進んだ。とりあえず第一関門突破である。
一回りすると情報交換となった。発表する材料もないので黙って聞いているしかない。まあその方が気楽でいいのだが。「ふむふむ」と良くわからないながらも彼らの話に耳を傾けた。
事件は起こった。ある人が発表した情報に「それは違う！」と異議を申し立てる人が現われたのだ。なぜか語気も荒く、喧嘩腰であるように思えた。言われた方も素直に指摘を聞き入れるわけでもなく、しばらくの間言い争いが続いた。他の参加者は「また始まったか…」とでも言いたそうな顔で静観している。
なんだこれは？　おれは驚いた。と言うより呆れた。楽しい趣味の集まりであると思っていたミーティングの惨状に。
白けた空気の中、情報交換は淡々と進んだ。時間を持て余した中での雑談タイムには活気が無かった。途中で帰ろうかと思ったがそれも言い出せずに最後までその場に留まった。

いま思えば、参加者全員 20 代前半と言うこともあって若気の至りもあったのだろう。生意気盛りのマウントの取り合いと理解すれば可愛いものだ。
おれはその後も毎月ミーティングに参加することになった。本当なら二度と参加する気が起きなくなっても不思議ではなかったのだが、代表者の人が頻繁に声を掛けてくれたりしたので救われた。その日「大事な話」は結局最後まで無かったのだが、それはもうどうでもよい。

せきやま☆れいわ

YAMAHA

へんしゅぅこぉき

ジャズ特集でけましたー！
ＪＡＺＺがお題で書いてくれる人おるんかなぁ・・・と思ってましたがめっちゃいっぱいジャズの記事いただけて(T-T)ﾂ-嬉しすぎ。ありがとうございます（≧▽≦）
さて「あーゆぼーわん」の編集を今回からさせていただくことになりまして、タイトルも『アーユボーワン』から『あーゆぼーわん』とひらがな表記にさせていただきました ^ ^
『あーゆぼーわん』は JK えぃみぃが SLBC リスナーズクラブの会報『Keep On Listening 』と共に会員の皆様にお届けしていたゆるぅい冊子でございました。そのゆるさをここでも醸しまくります。よろー。あっところで今スリランカからいつもご投稿いただいているアエーシャーと日本語放送やりたいなーって言ってるんですよね、スリランカで。これはアエーシャーの記事にも書かれてるけど日本語を勉強してる人に聞いていただきたい、それと日本の方々にも聞いていただきたい、という観点から内容はスリランカの事をわかりやすい日本語で放送するのがいいなーと考えておるのじゃよﾌﾌﾌ
しかしその電波日本にとどくんかーい！＝珍局。
それでは皆様、また次回お会いいたしましょう。あーゆぼーわん！

えぃみぃ

お・し・ら・せ

次号から新連載始まります！

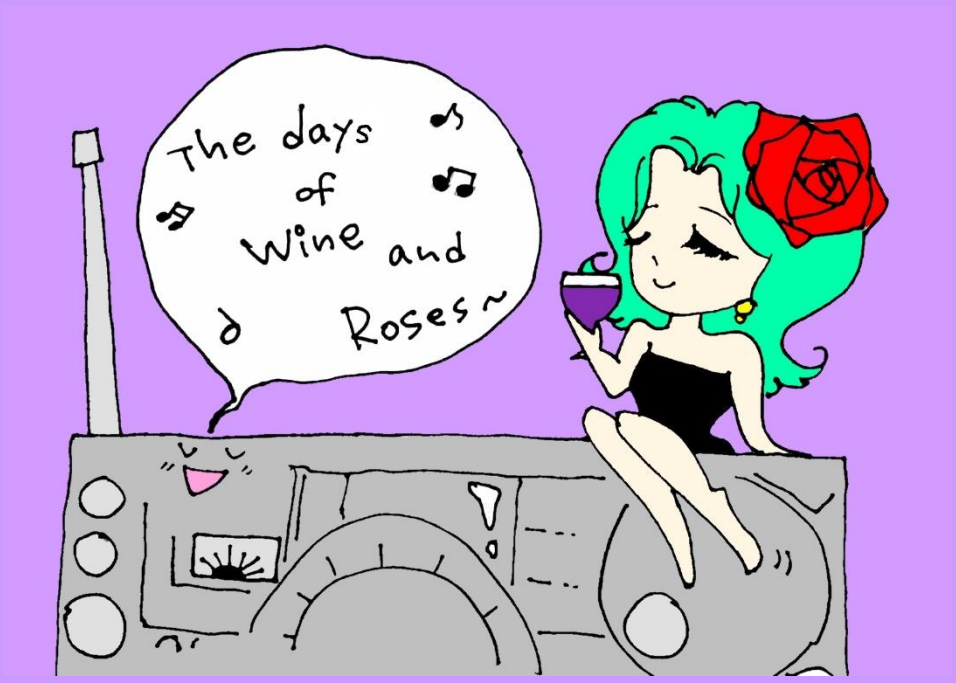
『大蛙の JAZZ と SAX と BCL よもやま話』お楽しみに！！

ＢＣＬファンの交流誌『あーゆぼーわん』№4

ＪＡＺＺの特集号（2020 秋）

発行日：　初版 2020 年 10 月 1 日／第 2 版 2022 年 2 月 1 日
編集人：　えぃみぃ（Office Samanalaya）／伊藤 晃(秋葉原 BCL クラブ)
発行所：　秋葉原 BCL クラブ
Web サイト：https://www.abc50s.net/

(C)秋葉原 BCL クラブ



秋葉原 BCL クラブ